

(8) グリッド出土の遺物

グリッド出土土器 (第229・230図)

1は関山Ⅱ式土器である。地文には結節縄文によるループ文と羽状縄文が施されている。2～5は黒浜式土器である。2～4は附加条縄文により施文する。5は横位の粗い単節縄文を施す。6～8は諸磯c式土器である。6は縦位に、7は斜位に結節貼付文を施す。8は斜状に施した条線の地文上に貼付文を施す。

9、10は山形状の突起である。9は波頂部に爪形文で縁どられた三叉文を描き、その開脚部に円孔を施している。裏面は大きく欠損する。10は二股の突起状を呈し、波頂部は内側に屈曲して頂部に円孔をあけ、ここから垂下した沈線が口唇部と結合する。貫通孔を施し、裏面は鰹状の隆帯を貼付する。

11は勝坂Ⅱ式土器である。口唇部直下から斜状に隆帯が垂下し、三角形の区画文を描き、爪形文を沿わせる。12は円筒形を呈する深鉢形土器で、口縁部に広い無文帯を有する。縦位の沈線文が文様帯を区画し、隆帯には交互刺突文を施す。

13～16は刻みを有する隆帯により区画文を描く。13は弧状の区画内を同心円状に沈線を描き、集合沈線を充填する。14は楕円形横帯文の一部であろう。15は区画内を蓮華文で充填する。16は隆帯が半肉彫状で、区画内は集合沈線で充填する。

17～20は縦位に区画する文様帯をもつ。17は半裁竹管による隆帯が文様帯を区画する。18は刻みを有する隆帯が区画文を構成し、内部に2列の蓮華文を施す。19は刻みのある隆帯の断面が矩形である。20は半肉彫状の隆帯が蛇行して垂下する。

21は区画文直下に広い無文帯を有する。22は屈曲部に平行する刻みのある隆帯が廻る。23は円形の貼付文が区画文と結節する。

24は浅鉢形土器で、口唇部はやや外屈する。口唇直下には角押文が2条廻り、胴部は隆帯を貼付して底状に肥厚する。胴部の地文はLRの単節縄文である。

25～33は阿玉台式土器である。25は半円形の突起部である。表面は側縁に沿って1条の角押文を施し、内部に弧状の角押文を充填する。26は胴部に貼付した鰹状の突起部で、区画文の起点となる。区画内は隆帯に1条の有節沈線文が沿い、右方は縦位の集合有節沈線を施す。27は口唇部がやや外屈する口縁部片で、胴部に横位の隆帯を貼付する。28は縦位の橋状突起である。29は鰹状の隆帯が区画文を構成し、内部に有節沈線文を沿わせ、下部には連弧状のモチーフを描く。30は胴部片で、楕円形区画文が2条の有節沈線文が沿った隆帯によって描く。31は広い無文帯を挟んで上下に爪形文が並走する。32は区画文の結節点で隆帯上に刻みを施す。33は浅鉢形土器で、口縁部が内屈する器形である。胴部は無文であり、口縁部には縦位の隆帯が口唇部から垂下し、文様帯を区画する。モチーフは角押文による楕円形区画文が端部で結節せず、屈曲部まで達する。

34は加曾利EⅠ式の深鉢形土器の橋状の突起部である。波頂部は隆帯により渦巻文を描き、ここから隆帯が蜷局状に垂下して裏面に回り込み、文様帯の一部に変化する。

35～40はキャリパー形を呈する深鉢形土器の口縁部である。35は山形状の突起を配する。波頂部には渦巻文を描く。口縁部は2本隆帯を横位に展開してモチーフを構成し、1本が途中で渦巻文に変化する。

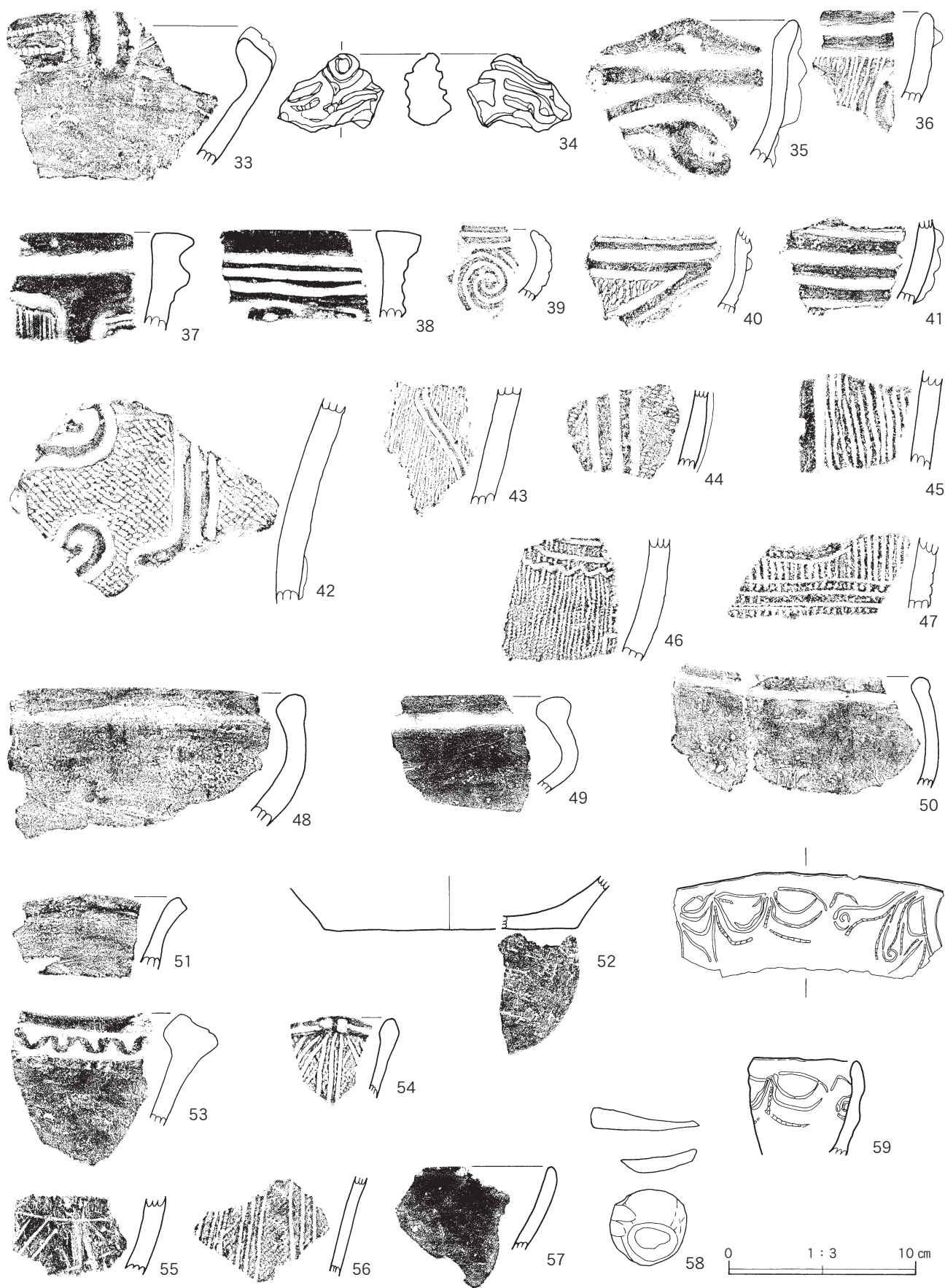
36は口縁部文様帯の区画内に渦巻文を描く。37、38は直立して立ち上がり、口唇部は平坦で、ともに肥厚する。37は区画文内が集合沈線を地文とする。38は口唇直下に3条の沈線が平行して廻る。39は密な沈線による渦巻文を描く。40は三角形の区画文を描く。

41は頸部付近の資料である。隆帯が3条平行して胴部と区画する。

42～45は胴部の資料である。42は半裁竹管による蛇行懸垂文である。43、44は隆帯による懸垂文である。



第229図 グリッド出土土器（1）



第230図 グリッド出土土器(2)

46は頸部との区画は平行沈線で、下部に小波状の沈線を横位に施す。

47は連弧文土器の胴部片である。胴部を上半と下半に区切る3条の沈線を描く。

48～51は浅鉢形土器で、いずれも無文である。48、49は胴部上半に最大径をもつ器形である。50は緩やかに内湾しながら底部へ至る。51は口唇部がわずかに外反する。52は底部片である。

53は中峠系の土器で、口唇部に交互短沈線を施した隆帯が廻る。

54～56は堀之内式土器である。54はわずかに波状を呈し、波頂部直下の刺突文間を起点に胴部に集合沈線による懸垂文を施す。55、56は胴部に描かれた懸垂文である。

57は加曾利B式と思われる口縁部片で、無文である。

58は縄文後期の注口土器の注口部である。横断面はやや扁平である。

59は勝坂Ⅲ式の小型の手づくね土器である。底部が欠失している。器形はやや内湾しながら立ち上がり、口唇部は先鋭する。胴部には沈線、あるいは有節沈線により、半円形、楕円形、蕨手状のモチーフが描かれる。口径は6cm、現存高は5cmである。

（9）漆塗土器

第4次調査区からは約1,000点の漆塗土器が検出されている。いずれも破片資料であるが、大型の破片については復元実測を行った。

漆塗土器の器形は大半が加曾利E式の浅鉢形土器である。また、描かれる文様は多様であり、フラットな器面に描かれるモチーフでは、通常の縄文土器に施されるものとは共通しない。塗彩される土器の部位は、口唇部、口縁部及び内面の加飾を念入りに行う一方、胴部下半に漆の塗彩がみられない個体が多い。

また、基本的に塗彩に関しては、黒漆を下地として塗った後、赤漆でモチーフを描くものがほとんどである。

第231図は調査区から出土した漆塗土器の分布である。参考として一般の土器の分布を第232図に示したが、両者はほぼ同様の分布傾向を示す。

遺構出土漆塗土器（第233～240図）

1、2は1号クルミ塚出土の漆塗土器である。1は口縁部片で、口唇部及び表裏面を漆で塗彩する。2は胴部下半の資料で、内面には対向する弧状のモチーフを赤漆で描く。

3、4は5号クルミ塚出土の漆塗土器である。3は口縁部がやや外反する器形で、5号クルミ塚の床面直上から出土した。表裏にモチーフを描いており、表面の三角形の文様内には茶色味を帯びた塗彩で充填する。黒漆は下地ではなく、文様を描くために使用されている。4は外面が弧状、内面は縦位の文様を赤漆で描く。

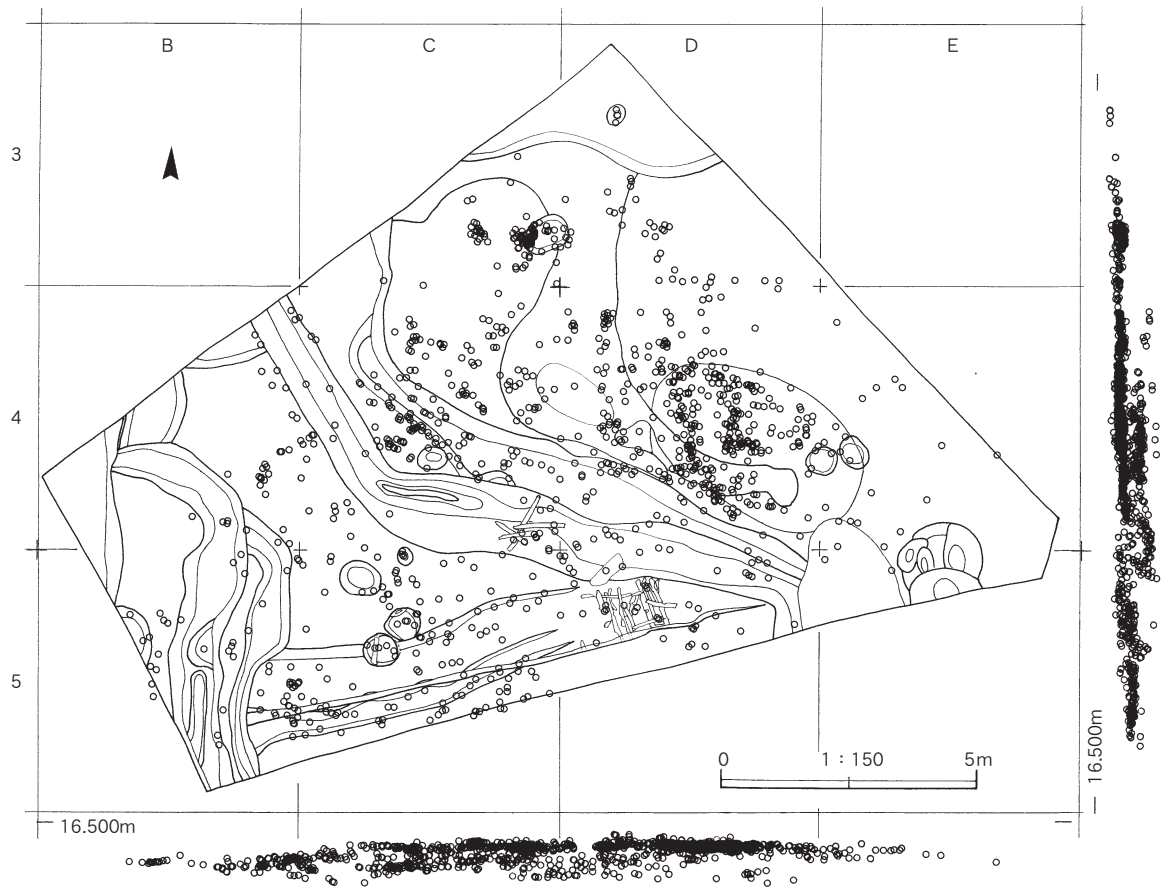
5は4号土坑出土の漆塗土器で、底部片である。内面に弧状のモチーフを描いている。

6は7号土坑出土の漆塗土器である。口縁部片で、口唇部、内外面とも赤漆で塗彩される。

7は9号溝跡出土の漆塗土器で、内外面に弧状のモチーフを描いている。

8、9は3号溝跡出土の漆塗土器である。8は胴部の屈曲部付近で、外面に帯状のモチーフを横位に施し、内面には渦巻文を描いている。9は外面に赤漆を環状に塗り、中央部を円形に塗り残して下地の黒漆を活かしている。

10～12は4号溝跡出土の漆塗土器である。10は口唇部直下の内外面を帯状に赤漆で塗彩する。11は胴部上半の破片で、表面に弧状のモチーフを描き、内面には黒漆を塗る。12は胴部下半の破片で、内面に連弧状の



第231図 漆塗土器の分布



第232図 土器の分布

モチーフを施す。

13は5号溝跡出土の漆塗土器で、内面に平行する弧状のモチーフを描く。

14～126は第4次調査区のグリッド出土の漆塗土器である。14～28は土器の隆帯に赤漆を施している。14は屈曲部より上部の文様帯に赤漆で台形状のモチーフを横位に展開させ、口唇部から派生した渦巻文に赤漆を塗彩する。15も同様に屈曲部より上半の文様帯に漆を塗彩する。下地は黒漆を用い、口唇の肥厚部、区画文及び渦巻文に赤漆を施す。内面は口唇部から垂下する矩形のモチーフを描いている。16は渦巻文を構成する隆帯と沈線に大胆な塗彩を施す。内面は全体を赤漆で塗っていたと想定される。17は肥厚した器面に赤漆を塗彩する。内面は口唇直下に帯状の赤漆を施す。

18～20は口縁部文様帯の隆帯と口唇の肥厚部に赤漆を施す。18、19は内面に半円形状のモチーフを描き、20は赤漆で塗彩したと想定される。

21～26は弧状の隆帯をモチーフとし、ここに赤漆を塗彩する。いずれも内面は赤漆による全面塗彩と考えられる。21～24は口唇部が残り、肥厚部に赤漆を塗る。

27は方形の隆帯に漆が塗られ、沈線は黒漆が塗り残される。28は波状口縁を呈する。口唇部直下は帯状に赤茶褐色の漆を塗り、隆帯以下は赤漆を塗彩する。

29は黒漆が器面全体に施し、口唇直下に赤漆で帯状のモチーフを描く。

30～61は口縁部片である。いずれも内外面及び口唇部全面に赤漆を施す。45は口縁の屈曲部以下に赤漆を全面に塗彩する。46は塗彩の明度を変化させて内面に文様を施す。47は下地の黒漆の上に赤漆による円形のモチーフを描く。48は内面の肥厚部直下から弧状のモチーフを垂下させる。49は内外に矩形の文様を描いている。50は口縁部の屈曲部以下に赤漆を施している。51は外面にW字状のモチーフを横位に展開し、内面は赤漆を全面に塗っている。52は内外面ともに帯状の赤漆でモチーフを描いている。53は器面全体に赤茶褐色の漆を塗彩し、下地を塗り残して文様を描いている。54は外面に矩形のモチーフがうかがえる。55は内外面ともに口唇部から赤漆による懸垂文を描く。56は口唇の肥厚部に黒漆と赤漆をクランク状に塗り分けている。57は内面に連続する弧状のモチーフがうかがえる。58は内外面ともに平行する帯状の赤漆を施している。59は外面の口縁肥厚部の直下が沈線状で、黒漆を塗彩する。60は口唇部が肥厚し、内面に赤漆を施し、直下に懸垂文を描く。61も同様に内面に懸垂文を描いている。

62～66は口縁部が内湾し、端部が肥厚する器形である。62～64、66は口唇部を赤漆で帯状に塗彩し、ここから直線状の懸垂文を描いている。65は内面に黒漆を下地とし、赤漆による弧状のモチーフを描く。

67は外反する口縁部である。横位に帯状のモチーフが赤漆で描かれる。68は内屈する口縁部片で、内外面ともに直線状の文様を描いている。

69～71は外傾する口縁部片である。56は下地を塗布せず、直接器面に弧状の文様を描く。70は口唇部から半円形の隆帯が派生し、赤漆を塗彩する。71は波状口縁を呈し、外面は弧状のモチーフを描く。

72～74は口縁端部が外屈する土器である。72は外面に帯状の文様を赤漆で平行して描く。73は胴部の屈曲部に円形刺突文を施す隆帯が廻り、この上面には赤漆を施し、同系色で弧状のモチーフも描いている。74は外面に隅丸方形のモチーフを描いている。

75、76は口唇端部が内屈する器形である。75は矩形のモチーフを外面に描く。76は口縁の肥厚部に赤漆を塗彩し、直下は赤漆による帯状の文様を描いている。

77～79は突起部を一括した。77は中空突起で左右貫通孔となるが、前面は円孔である。外面は全体的に赤漆が塗られていた。また、内面には黒漆を下地として横位に帯状のモチーフを平行して描いている。78は貫通孔を有する。内外面ともに全体的に赤漆が塗彩されていたと想定される。79は緩い山形状の突起で、半円

形のモチーフに赤漆が塗られ、中心部は黒漆が施される。

80～88は胴部上半の資料である。いずれも外面に弧状のモチーフを描き、内面は赤漆を全面に塗っている。

89～95は同様に胴部上半の資料で、いずれも内面に弧状のモチーフを描く。90、92～95の外面は漆を塗彩していない。91は内外面にモチーフを描く。93、95は赤漆を下地にし、明度の違う同系色でモチーフを描いている。

96～108は胴部下半の資料である。いずれも内面に弧状のモチーフを描いている。96～106は外面に漆の塗彩が認められなかった。104は赤漆を下地に同系色を上塗りし、対向する弧状のモチーフを描いている。

109～114は胴部下半の資料で、内面に帯状のモチーフを直線的に描く。110、111、114は外面の漆による塗彩が確認できなかった。

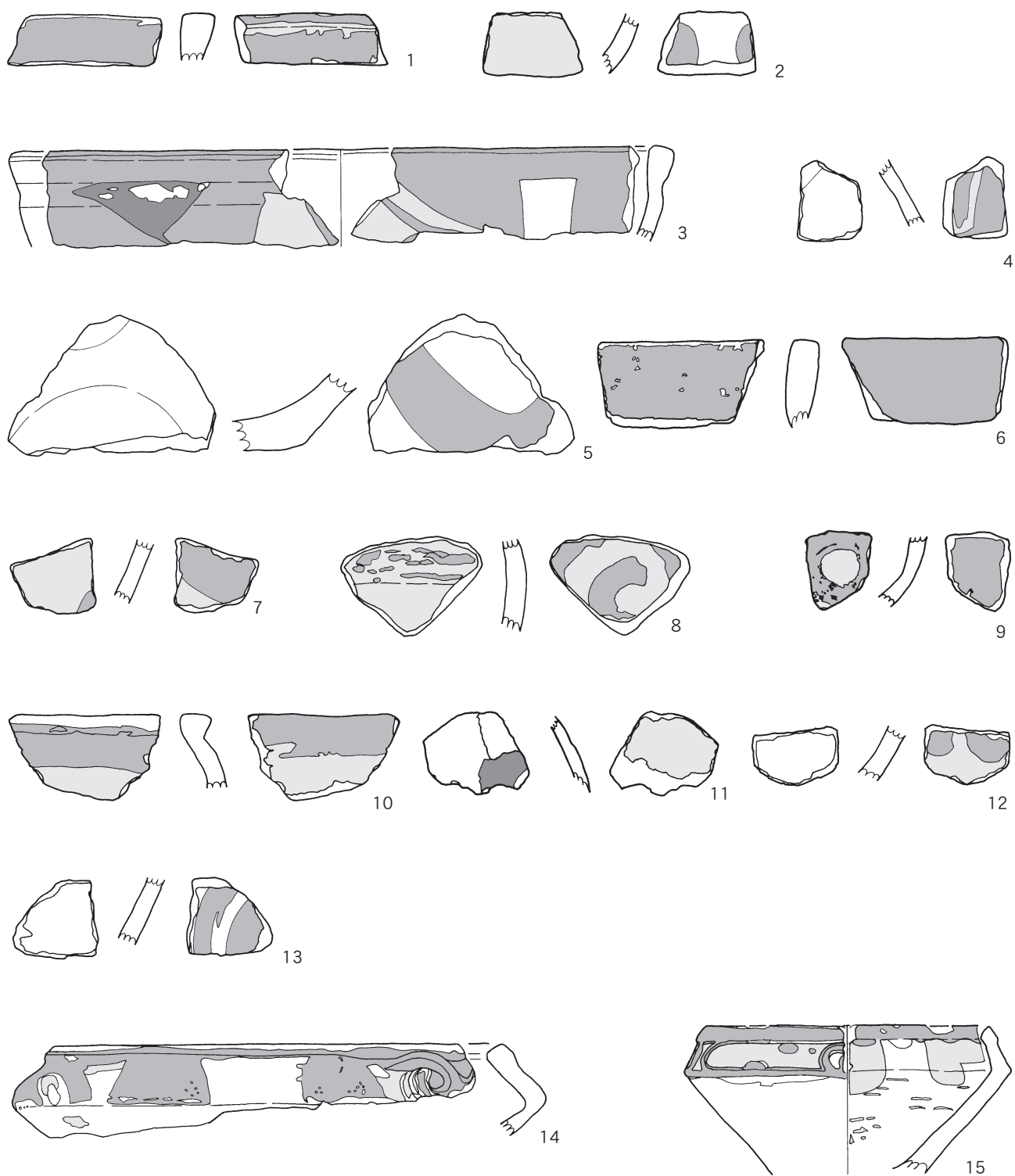
115は上げ底の深鉢形土器の底部片である。漆のパレットに転用したと想定され、内部に硬化した漆の付着が、器面にはササタケ類の繊維を拵^{たが}とした痕跡が2条認められる。

116～120は漆が施された勝坂式土器である。いずれも隆帯上に刻みを有する。116は全体的に黒漆を施しているように見え、屈曲部の隆帯直下に赤漆を帯状に描いている。117は内面を黒彩する。118は隆帯直下の胴部を赤彩している。119は内面に帯状のモチーフを赤漆で描いている。120は内外面ともに赤い発色が認められ、内部は下地を塗らずに直接赤漆を塗彩している。

121～124は縄文時代後期の土器で、121、123は3号溝跡、122は4号溝跡から出土した。121は称名寺式土器の突起部である。波頂部から渦巻状に隆帯が垂下する。全体的に赤漆を塗彩する。122は波状口縁を呈する。内外面ともに赤漆を施す。123は土製腕輪の一部と想定される。外面に赤漆を施すが、内面は塗彩しない。124は加曾利B式の浅鉢形土器である。内面に平行する隆帯を施し、内外面ともに赤漆を全面的に塗彩する。

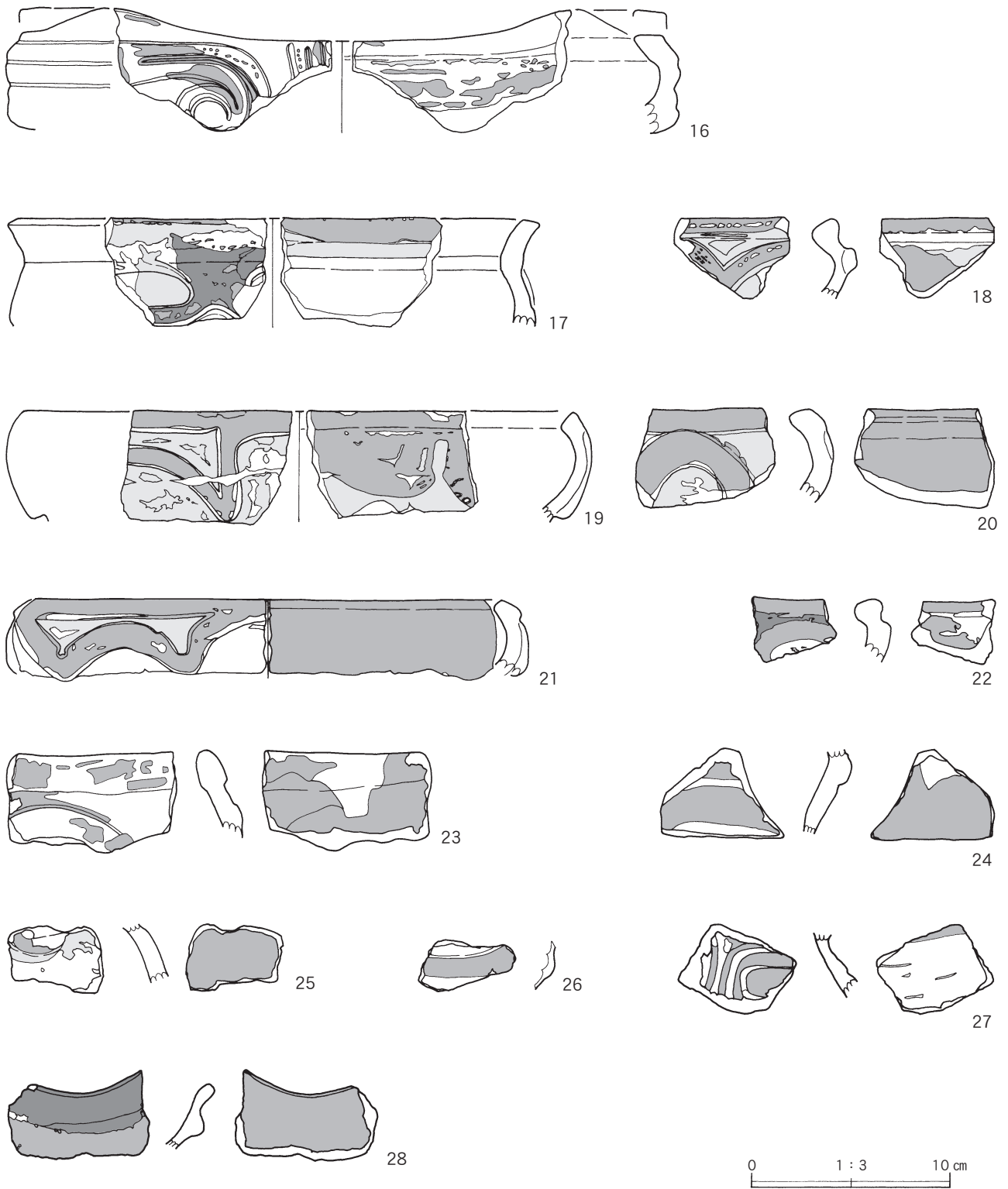
125は弥生時代後期の壺型土器の口縁部であろう。内外面ともに赤漆を塗布する。

126は磨石である。端部に赤色の鉱物が付着しており、ベンガラ^{ベンガラ}の粉碎に用いたものと想定される。

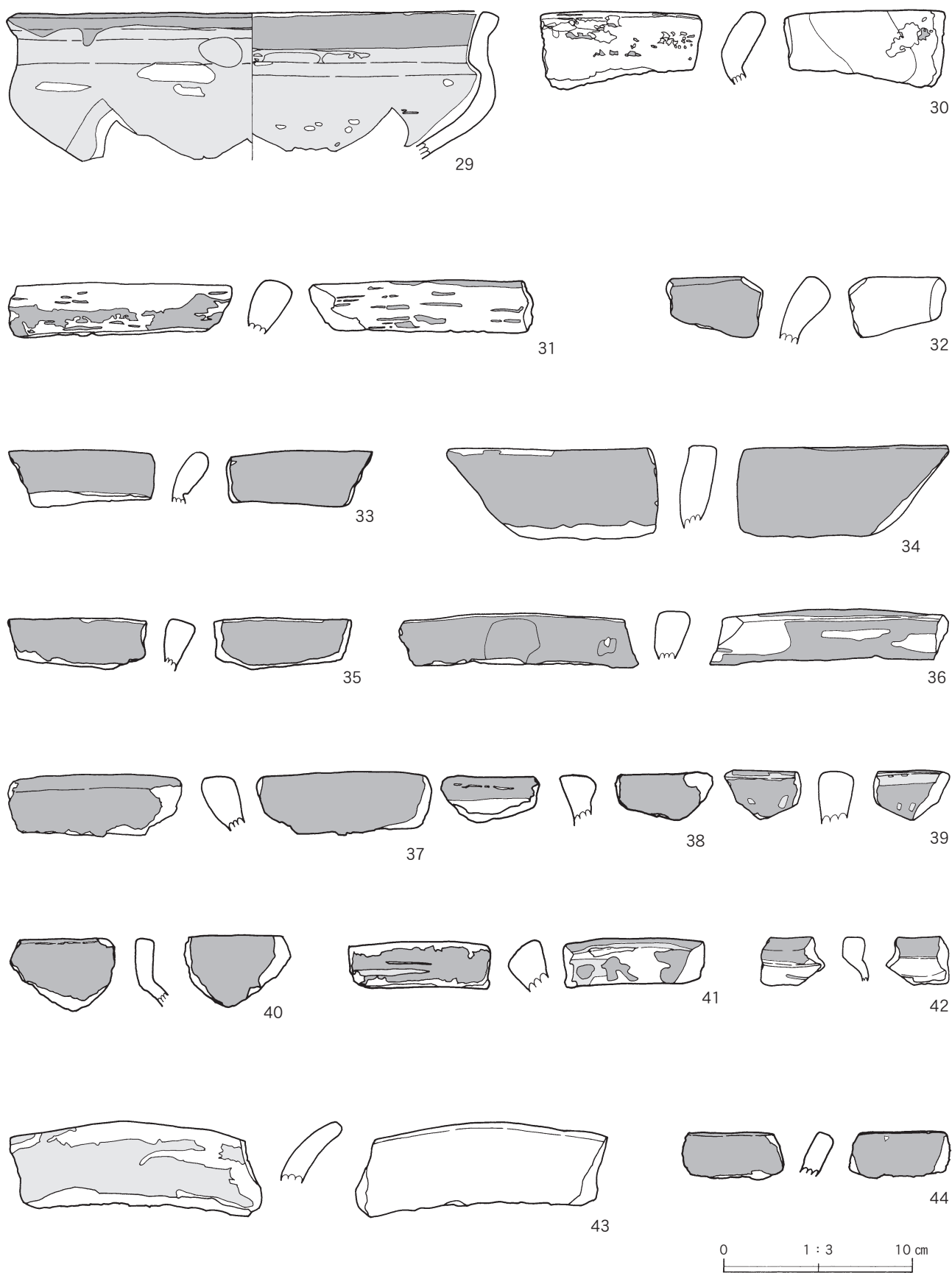


0 1 : 3 10 cm

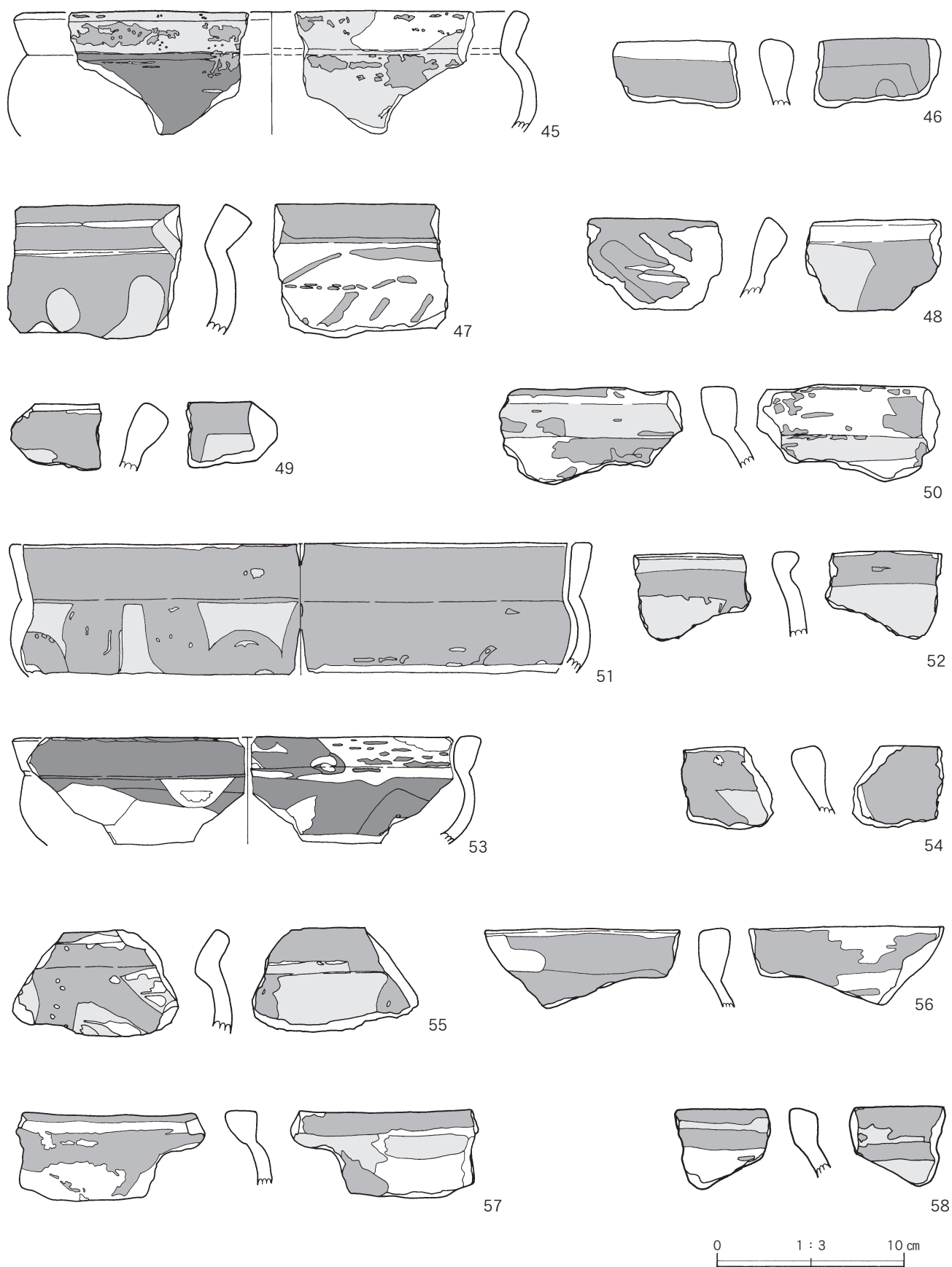
第233図 漆塗土器（1）



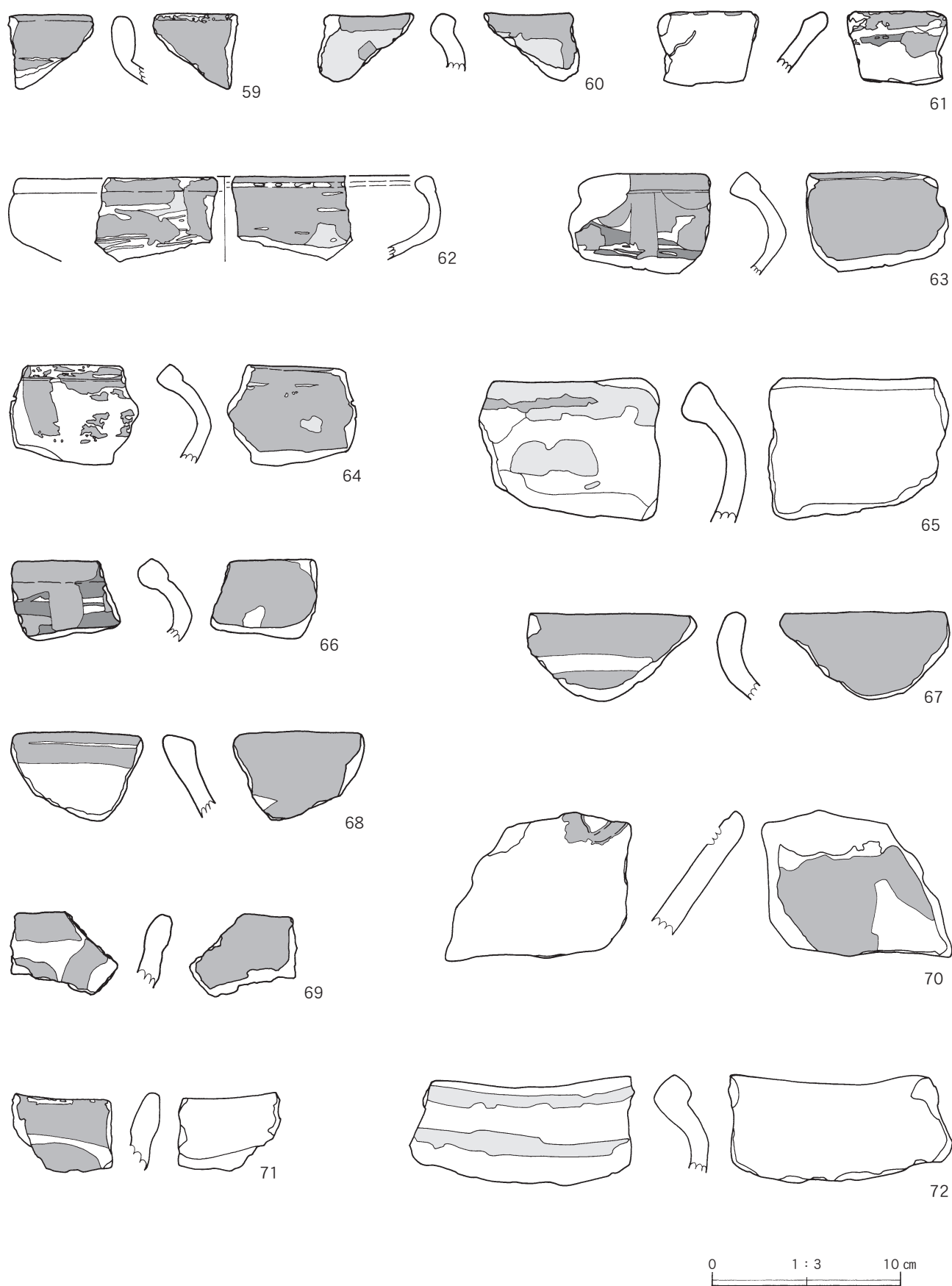
第234図 漆塗土器（2）



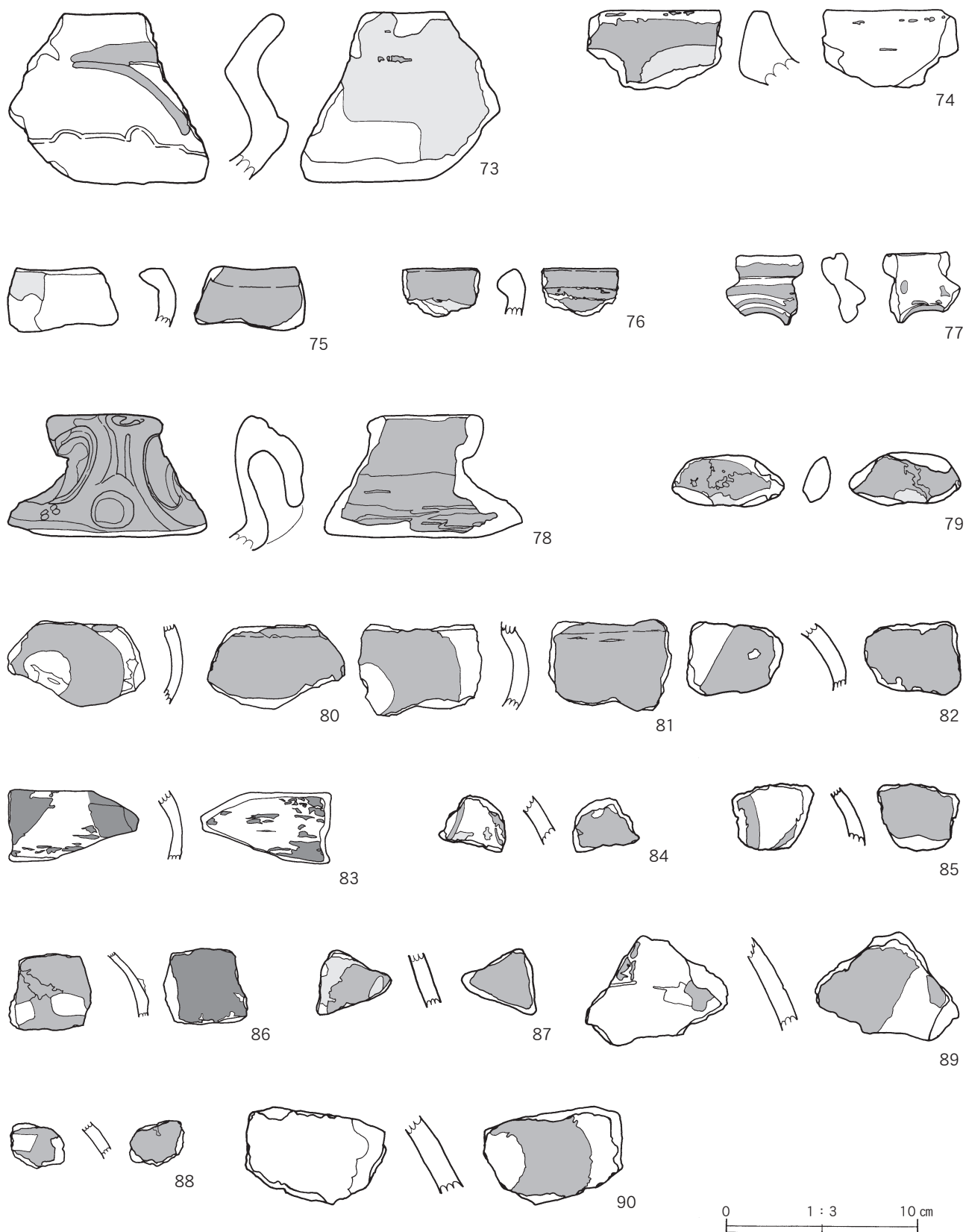
第235図 漆塗土器（3）



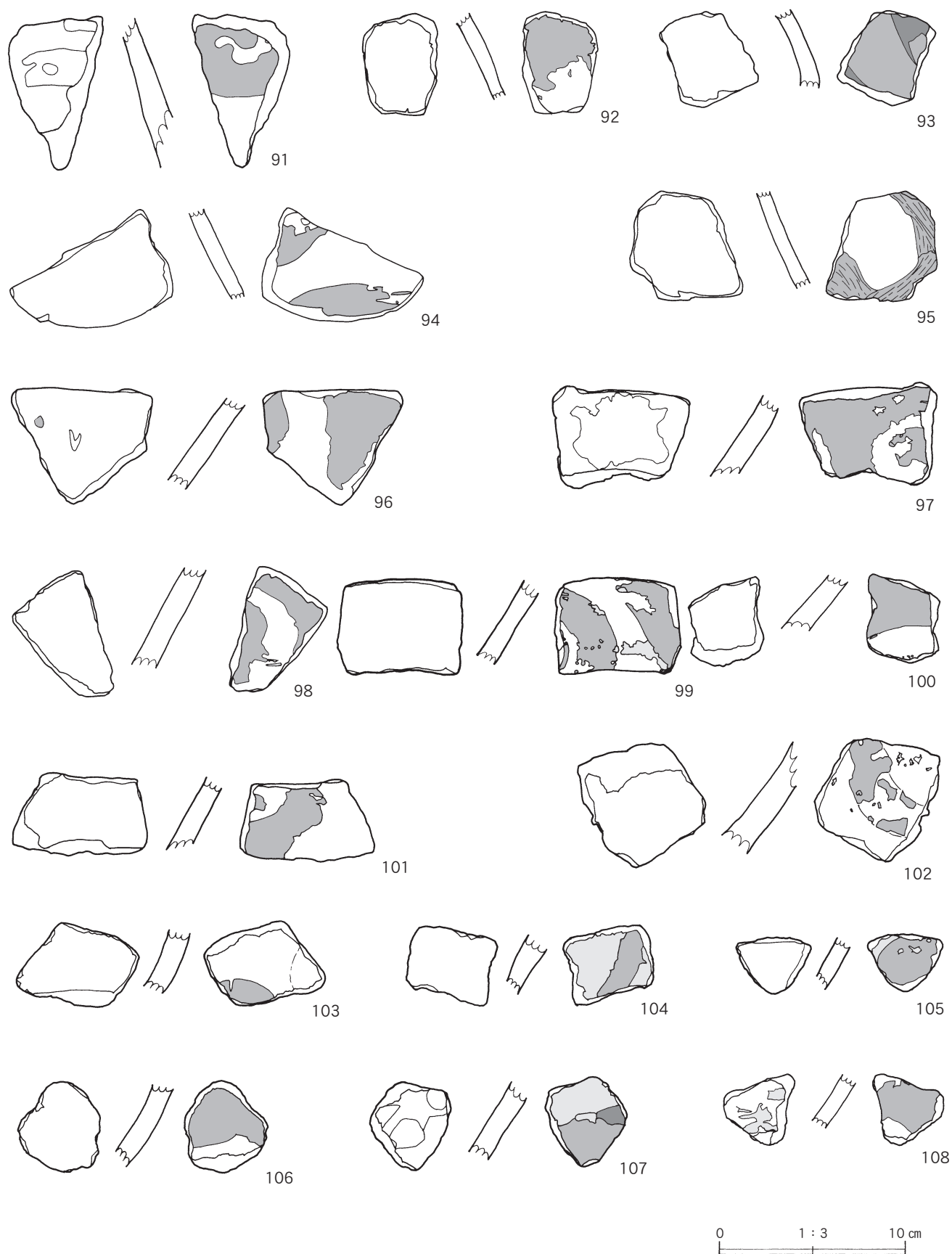
第236図 漆塗土器（4）



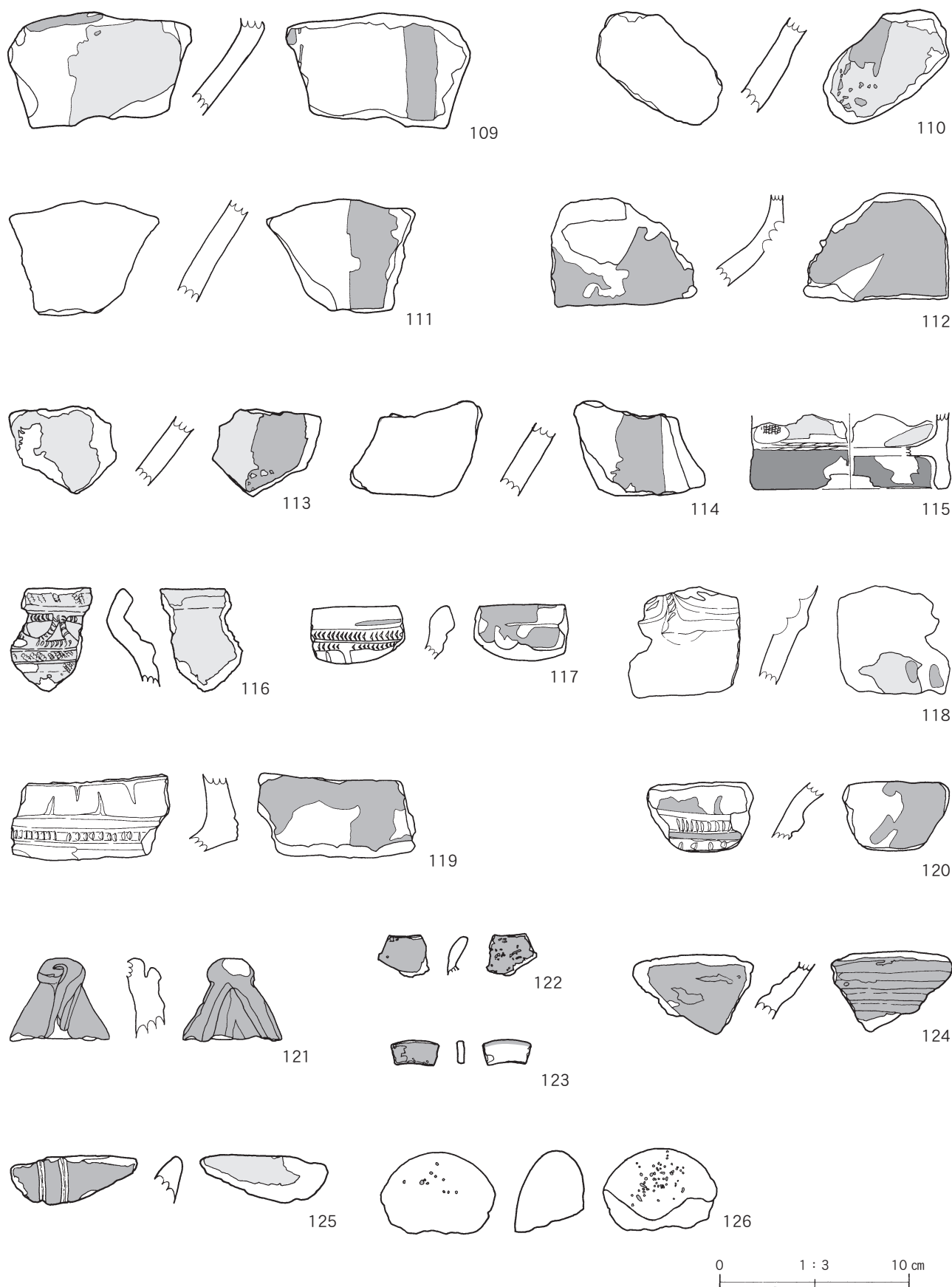
第237図 漆塗土器（5）



第238図 漆塗土器 (6)



第239図 漆塗土器（7）



第240図 漆塗土器（8）



第241図 石器分布図

(10) 石器（第242～260図、第38表）

第4次調査区は台地直下の低地の調査であり、調査面積は最も狭小であるが、出土した石器は他の調査区と比較して最も多い。クルミ塚や土坑等の遺構の検出例もあるが、有機的な共伴関係については今後の検討を要する。総量は約113kgが得られ、利器を257点抽出し、ここでは低地における調査であることから、おおむね出土層位に基づき図示した。なお、時期的に旧石器時代末期に属する細石刃核やブランクは、資料の少ない大宮台地北半においては、その出土位置も含め貴重な事例といえる。

1はチャートの横長剥片を折り取り素材とし、基部付近の側縁及び折り取り面の全側縁に刃潰し加工が顕著に認められることから、ナイフ形石器とした。2、3はいずれも自然面を有する漆黒色の黒曜石を素材とした細石器刃核である。5、6はその形状からやや小ぶりであるが、細石刃核のブランクであろう。7、17、163は石核に分類した。

10、12、16はスクレーパーである。10は周囲に調整剥離を施す。12、16は自然面のある横長剥片を素材とし、周囲に調整剥離を施している。8、9、11、13、18は石材が異なるものの、いずれも一部に小剥離痕が認められ、使用痕のある剥片とした。4、14、15、42、44、45は剥片である。ただし、15は凝灰岩を用いよく磨かれ、稜が認められることから磨製石斧の断片の可能性もある。4は自然面を有した黒曜石の剥片である。18は被熱のためか色調が変化している。

20～41は石鏃である。26は先端部を欠いているが、その形態から未成品かもしれない。27と41は平基鏃に近く形態もよく類似している。素材の主要剥離面を有し、先端部の尖りが緩く、調整もやや雑な印象を受ける。欠損状況については、先端部のみの欠損が6点（22、24、26、31、36、37）で、翼部のみの欠損が2点（32、

38)、先端部と翼部の両方の欠損例が2点(29、39)、大きなダメージを受けた例が1点(40)と半数以上が欠損しており、水場との関連も考慮できるかもしれない。20、21は2号クルミ塚より検出され、いずれも完形品で、側縁が28、31同様に鋸歯状の調整となっており特徴的である。

以上の石器については図版作成の便宜により、器種ごとにまとめて図示した。したがって、出土遺構、層位などについては一覧表を参照願いたい。

土坑出土石器 (第244・253図)

54、60は3号土坑覆土からの出土資料で、両方とも打製石斧である。54は下半が欠損し、器厚が非常に薄い。60はほぼ完形のいわゆる短冊形の打製石斧で完成品である。

58、171は4号土坑覆土から出土した。58は凹石の断片、171はやや厚みのある礫を素材とした凹石である。

クルミ塚出土石器 (第244図)

48、49は2号クルミ塚からの出土で、48は多孔石を再利用した打製石斧である。49は石皿から多孔石に転用された残片であろう。

50は4号クルミ塚出土の石核である。

52、56、57は6号クルミ塚出土で、52は打製石斧の断片、56は磨石の断片、57は上下両端に弱い凹みがみられ、石錐の可能性がある。

溝跡出土石器 (第244・245、256～259図)

216～220、223、224、226、228、234、237、246、248、249、251は2号溝跡出土資料である。本溝構は弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構であるが、覆土中に縄文時代の石器が流れ込んでおり、ここに掲載した。216～220は打製石斧である。216は器肉が厚く、刃部を再生した可能性がある。218は細身で、刃部が欠損している。219、220は欠損品である。217は棒状の礫を半裁したものを素材としており、上下逆に図示したが、先端部に刃を対象物に当てたためにできるような剥離が認められる。223、224は調整剥離の状況からスクレーパーとしての機能が考えられる。226は石核とした。228、234は端部に敲打痕が認められることからハンマーないし敲打器であろう。235、236は磨石の断片である。246、248は棒状の礫を用いた敲打器で、いずれも欠損している。249、251は石皿の断片であろう。

211、213～215は3号溝跡出土資料である。211は断面形態や稜の存在から磨製石斧の断片である。213、214はいずれも打製石斧の断片である。213は重量感のある大型の石斧である。215は横長剥片を素材としているスクレーパーである。

62、63は4号溝跡出土資料で、62は磨石の欠損であろう。63は石皿の残片で、中央部に3か所小さな凹みが認められる。

51、55、59、61は4号溝跡覆土からの出土資料である。51は頭部と刃部を欠いた打製石斧の断片で、61は頭部をわずかに欠損した、やや分厚く重量感のある打製石斧である。55、59は磨石の断片であろう。

65～69は6号溝跡の覆土出土資料で、65はいわゆる分銅形打製石斧の頭部であると考えられる。66、69は磨石の欠損品であるが、表裏両面に小さな凹みが認められる。69は一部に敲打痕が密に認められる。67はわずかではあるが端部に敲打痕が認められるため敲打器と考えた。68はやや扁平で、凹みの認識が希薄であるが石皿の残片と考えた。

層位別出土石器（第243、245～256図）

64、70～74、76はⅡa層出土資料である。70は磨石で、71は浅い凹みが観察されることから凹石とした。72は棒状の礫を半裁したもので、自然面は比較的よく磨かれており磨石とした。73、74、76はいずれも石皿の断片で、多孔石に転用されたものであろう。

75、77～89はⅡb層出土資料である。75、77は打製石斧である。75は調整剥離により全面を整形した小型の石斧であるが、器厚は1.5cmあり、平面形態に比べて分厚い印象を受ける。77は表裏両面に自然面を残すことから、扁平の礫に調整剥離を施し、打製石斧としたものと考えられる。78は断片であり明確ではないが、凹石と思われる。79～87、89は磨石と分類したが、79、86は敲打器の可能性もある。また、87は石皿の破片の可能性も考えられる。88は多孔石の断片である。

90～100、134はⅡb層出土資料である。90はスタンプ形石器であらう。91、134は打製石斧の断片、93は周囲を丁寧な剥離作業で整形しており、スクレーパーと考えた。92、94～100は磨石と分類した。94はこの種の石器としては希な完形品であり、扁平な円礫を素材としている。98～100は断片であり、石皿などの断片であった可能性もある。

101～129はⅡ層出土資料である。101～103、105、107、125、129は打製石斧である。107は頭部をわずかに、また、胴部下半を欠損するが、優美な短冊形の石斧である。103、105は丁寧な剥離調整によって整形される。いずれにせよ土掘具としての打製石斧とは考え難い。小型磨製石斧と同様、小型打製石斧として良いかもしれない。104は磨製石斧の刃部の破片である。121は頭部、刃部を欠損するが、器面の調整や石質から磨製石斧と想定される。106は表面に2か所の浅い皿状の凹みが認められる凹石である。裏面には線状の研磨痕が認められる。122は両端部に敲打痕が認められ、敲打器とした。108、109、112、113、117は円形、もしくは楕円形の扁平な礫を素材とした磨石である。111、119、120はそれぞれ大きさは異なるが、細長い礫を素材とした磨石である。114は断面形が蒲鉾形の礫を、115、123はほぼ球形の礫を、110は棒状の礫を、それぞれ素材とした磨石である。124は上下両端が欠損したと思われるが、下端の面は磨滅痕が認められ磨石とした。126は石皿のほぼ半切と思われるが、機能面はわずかに凹む。また、表裏面に小さな凹みが複数認められる。128は断面ロート状の凹みが認められることから多孔石とした。116は断片であるが磨石とした。

130～133、135～210はⅢ層出土資料であり、この層中からは最も多くの石器が検出された。130～133、135、137～151、152、156、157、159、160、164、165の26点は打製石斧とした。大きさ、形状等は非常にバラエティーに富む。132、133、137、138、141、147、156、157、160、164、165は完形もしくはほぼ完形品と思われ、その他はすべて残欠である。138、156、164、165などはやや土掘具としての打製石斧とは異なるかもしれない。特に138は多孔石の残片の活用であり、刃部が凹んでいる。また、156は先端が尖っており刺突具とした方がよいかもしれない。148はかなり大きな石斧の先端部と考えた。また、139は欠損後、スクレーパーとしての再活用の可能性も考えられる。

161、167は磨製石斧であらう。161は剥離痕を明確に残すが、器面の調整やその石質、断面形から磨製石斧としての機能が類推されるためこの分類とした。

207は出土時点では2片に分割された状態であった。それを接合したもので、石核と考えられる。また、凹みが認められるので、凹石であった可能性もある。

162は自然面を有する横長剥片の縁辺の一部に、刃こぼれ状の剥離や小さな剥離が認められることから使用痕のある剥片とした。

202、203、205は凹石であり、202、203は片面のみの例で、205は裏面が剥落しているが、表裏に対になるように凹みが認められる。

208、210は多孔石である。210は石皿を兼ねており、比較的明瞭な稜を成形する。201、204については小片であるが、凹みの形状や、配置から多孔石の残片と考えられる。

166はやや根拠に乏しいが、石皿の残片と思われる。

209は断面が三角形であり、長楕円形の平坦面が認められることから、台石と考えた。

168～170、206は磨石及び敲打器である。186、187はいずれも完形品で、細長い扁平な礫を素材としている。172、174、175、179、185、189、194、195、199は円形ないし棒状の小さい礫を素材としており、多くが完形品である。173は拳大のほぼ球形の礫を素材とするが、182は方柱状の素材を用いており対照的である。また、195は断面形が三角形の細長い礫を素材とする。191、198は棒状の礫を素材としており、184、188、190などはその類の残欠であろう。170、175、200等はいずれも残欠であり、元の形状を類推するのが困難である。

158は緑泥片岩であり、石皿などの残片に剥離を加えたものであろう。

グリッド出土石器（第257～260図）

221、222、225、227、229、231、232、238～245、250、253～257はグリッド出土資料を一括した。222、225、229は打製石斧に分類した。225はその石質から石皿などを再利用したものと考えられる。

227、228は敲打器に分類した。227は扁平な細長い礫を素材とするが、両端部に敲打痕及び敲打時に生じたと想定される剥離が認められることから敲打器とした。228は横断面が隅丸三角形の礫を用い、両端部に顕著な敲打痕が認められる。また、中央部に円形の浅い凹みが認められ、凹石との分類も可能ではあるが、ここでは凹石から敲打器に転用されたものと考えた。

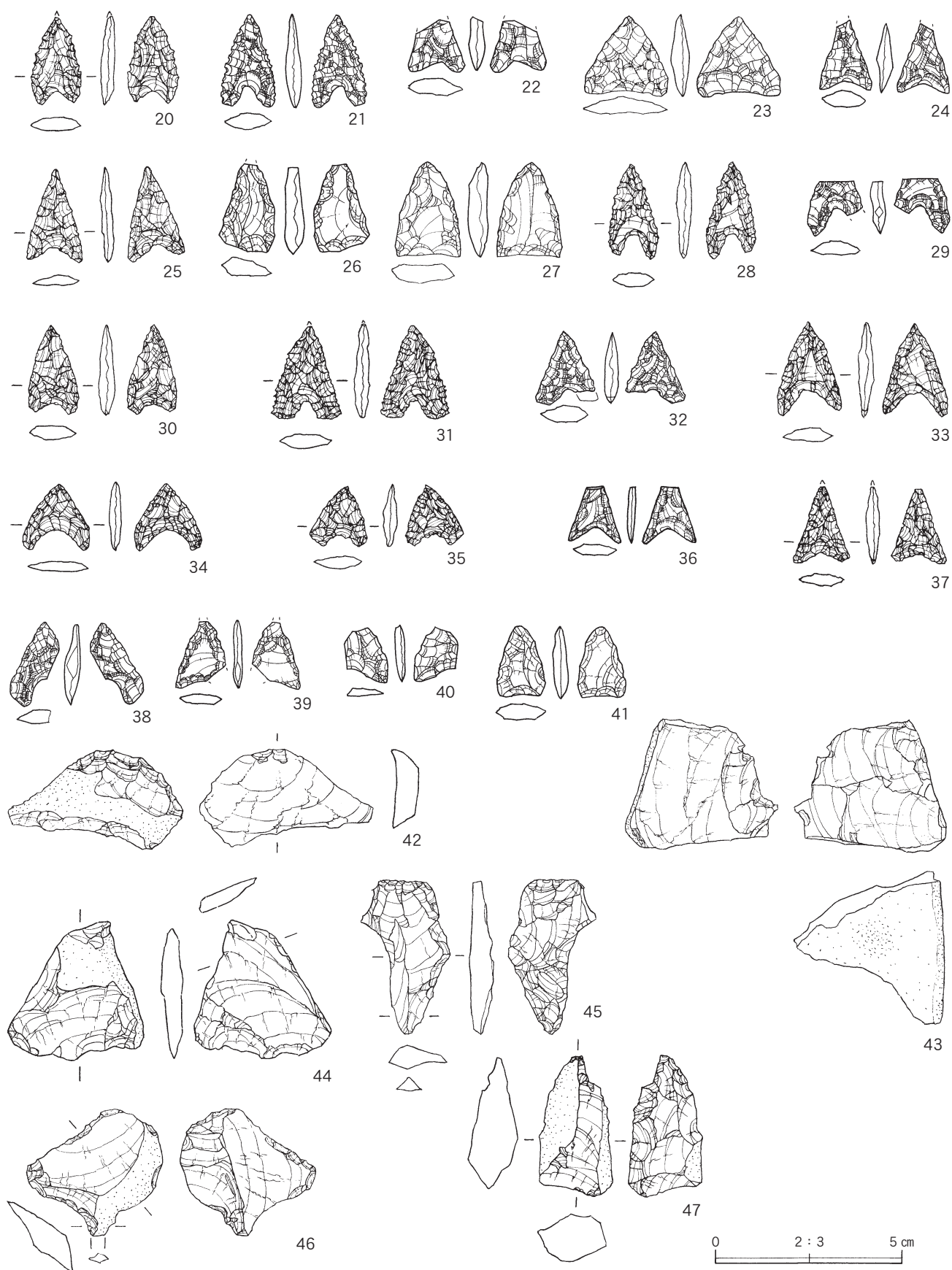
230は小型の磨製石斧の頭部と思われ、231は磨製石斧の刃部付近の残片である。

238、240～242は扁平な幅広の礫を、244、245は棒状の礫を、239は横断面隅丸三角形の礫を、それぞれ素材とした磨石である。243は扁平な円礫で、わずかに剥離痕が観察される。便宜的ではあるが磨石と分類した。

250、252、253～255、257は石皿を再利用した多孔石の欠損品及び残片であるが、その凹みについては断面形態や配置状況がやや異なる。252、255は小さな断片であるが、断面ロート状の凹みを密に配置する類であろう。253、254は浅い凹みで、しっかりした形状ではない。254、257は共にほぼ半割しており、元の石皿の形状が類推され、中央の凹み部分が明瞭に観察できる。



第242図 石器（1）



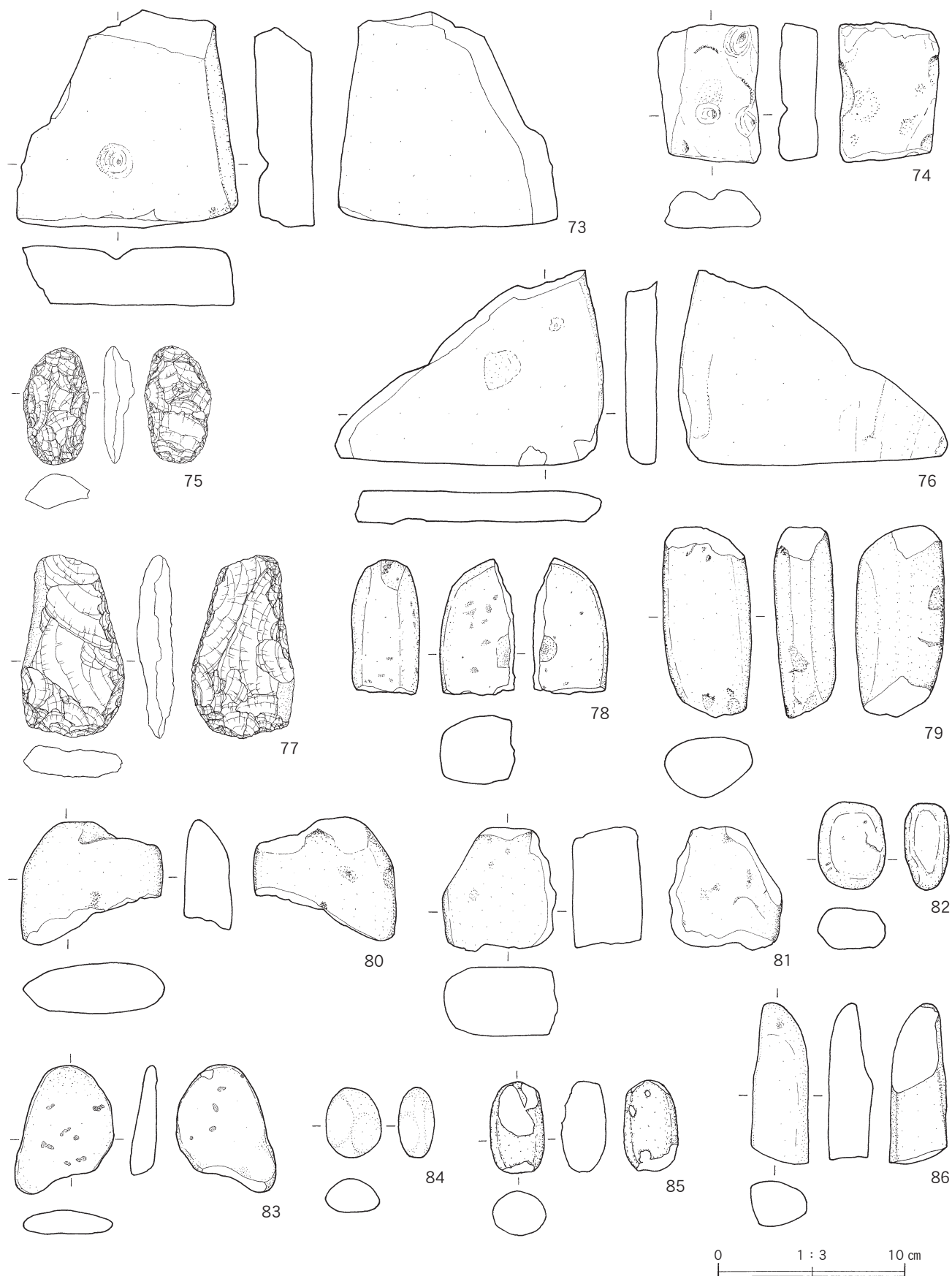
第243図 石器（2）



第244図 石器（3）



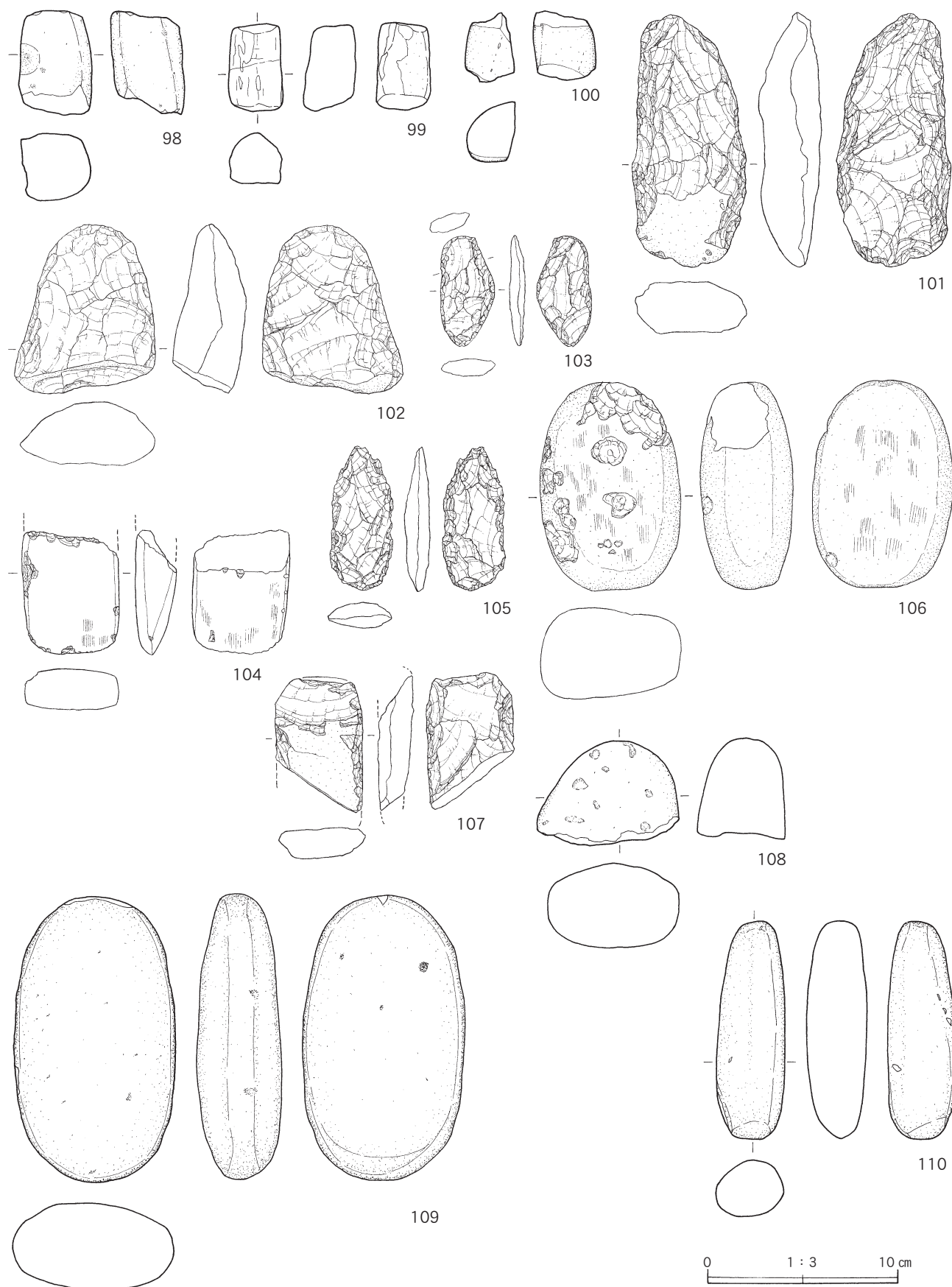
第245図 石器（4）



第246図 石器（5）



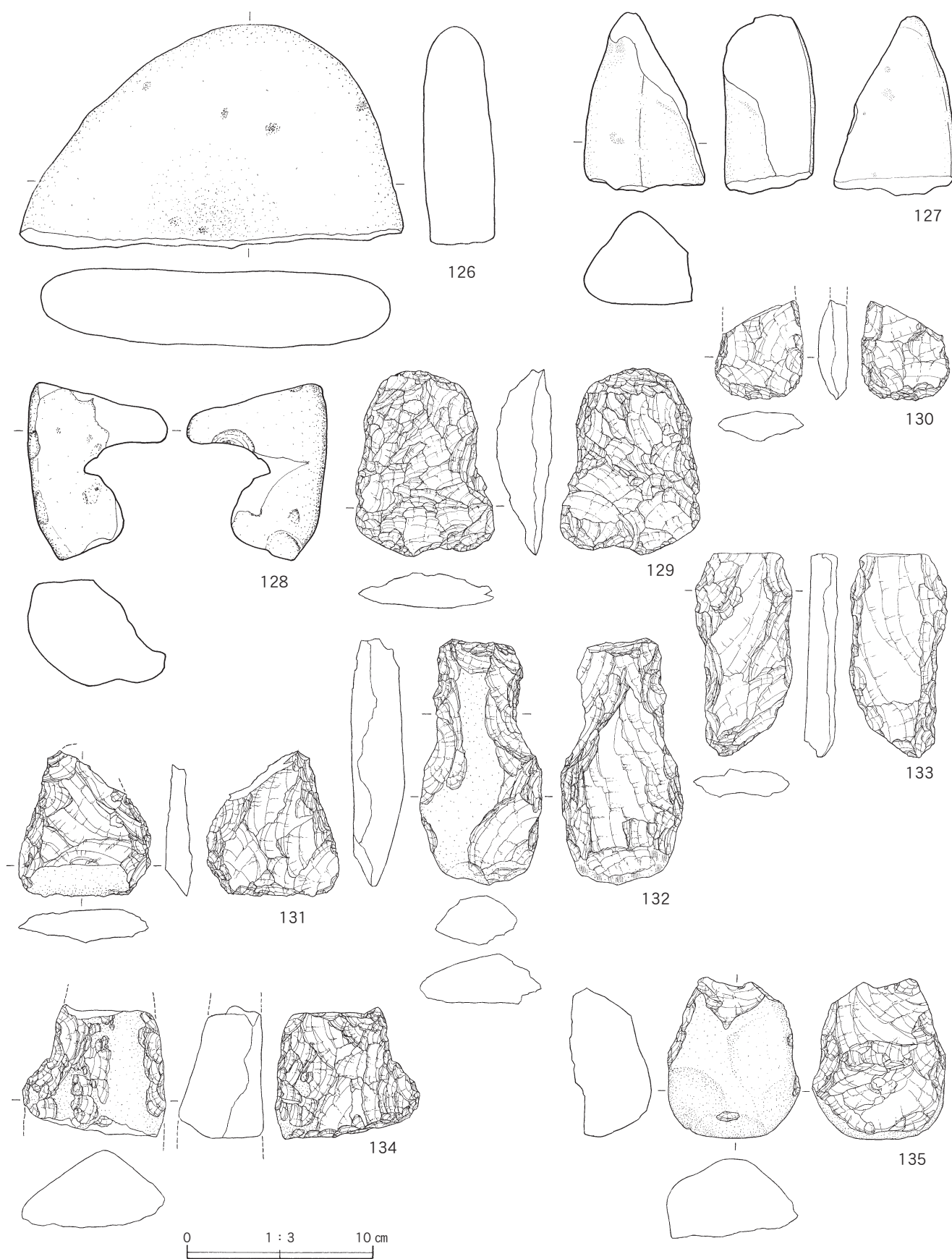
第247図 石器（6）



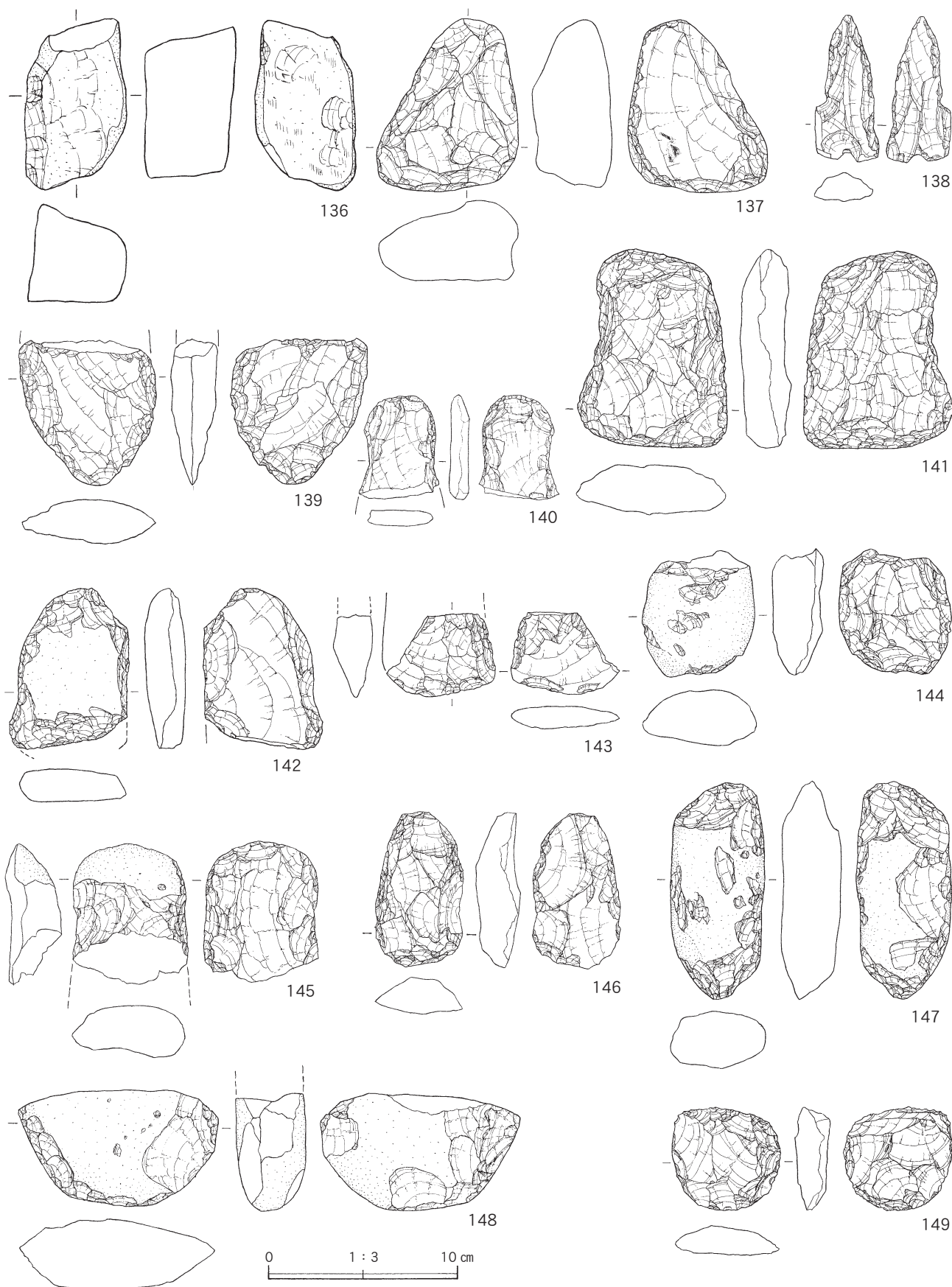
第248図 石器（7）



第249図 石器(8)



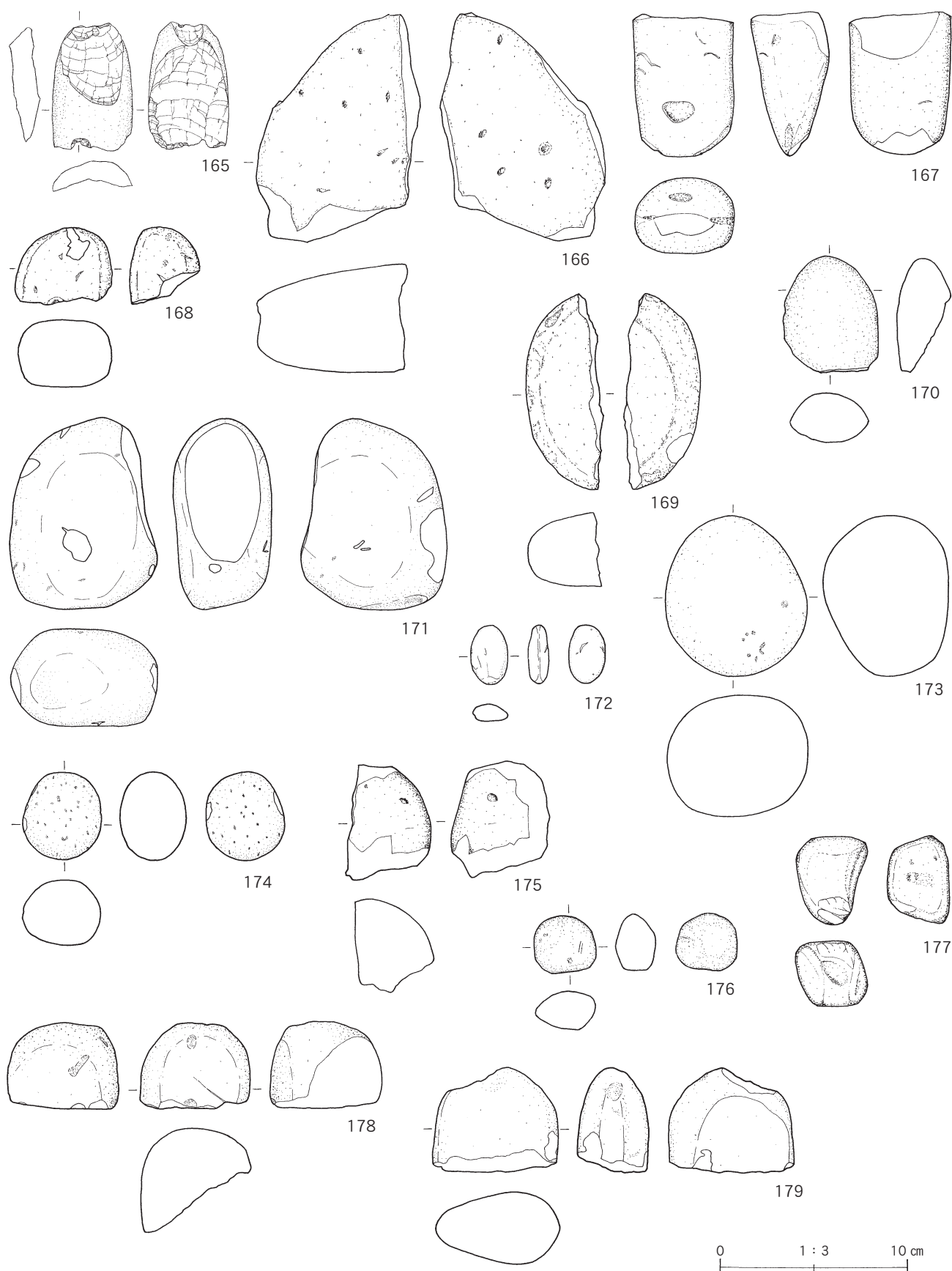
第250図 石器（9）



第251図 石器 (10)



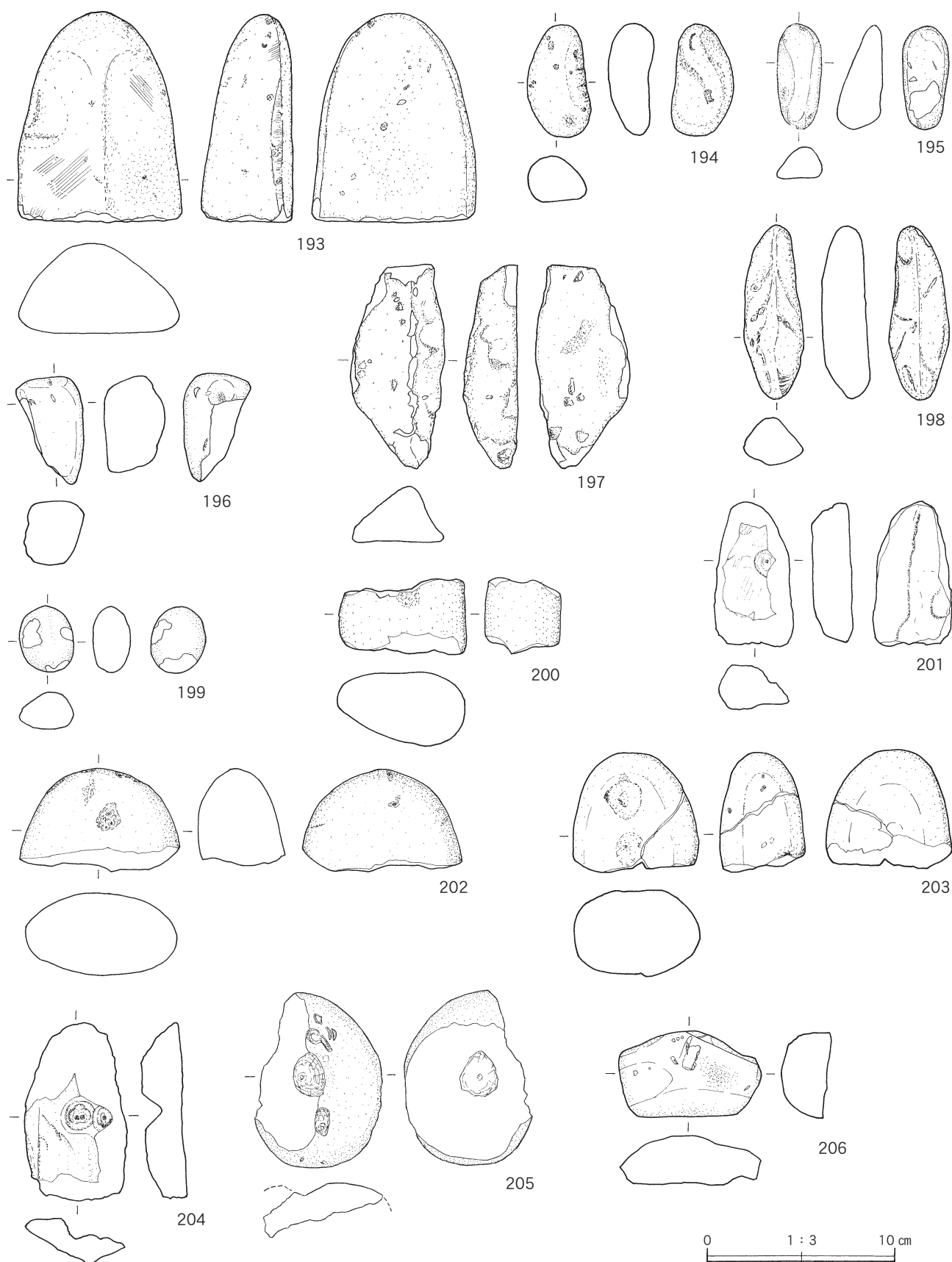
第252図 石器 (11)



第253図 石器 (12)



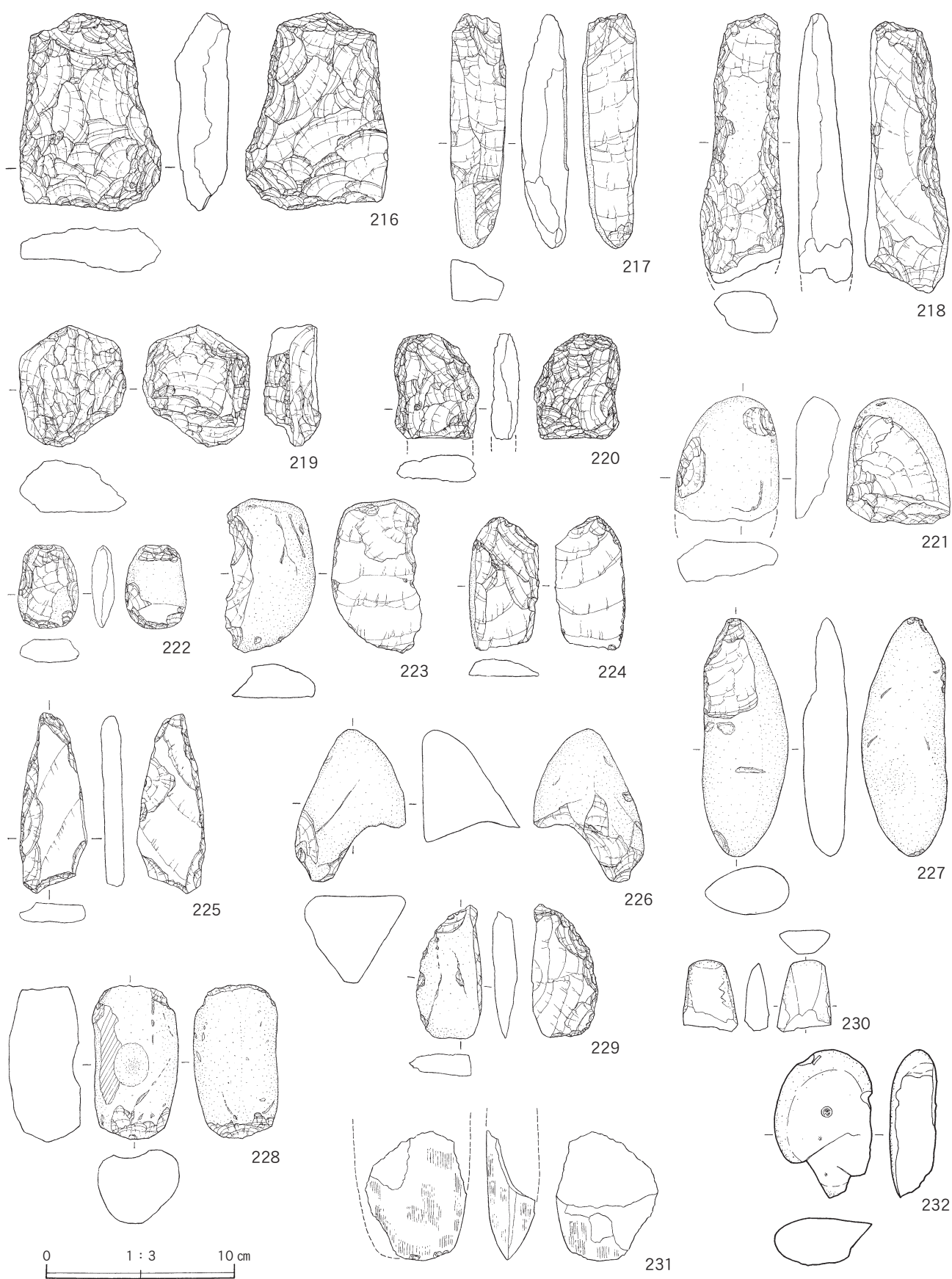
第254図 石器 (13)



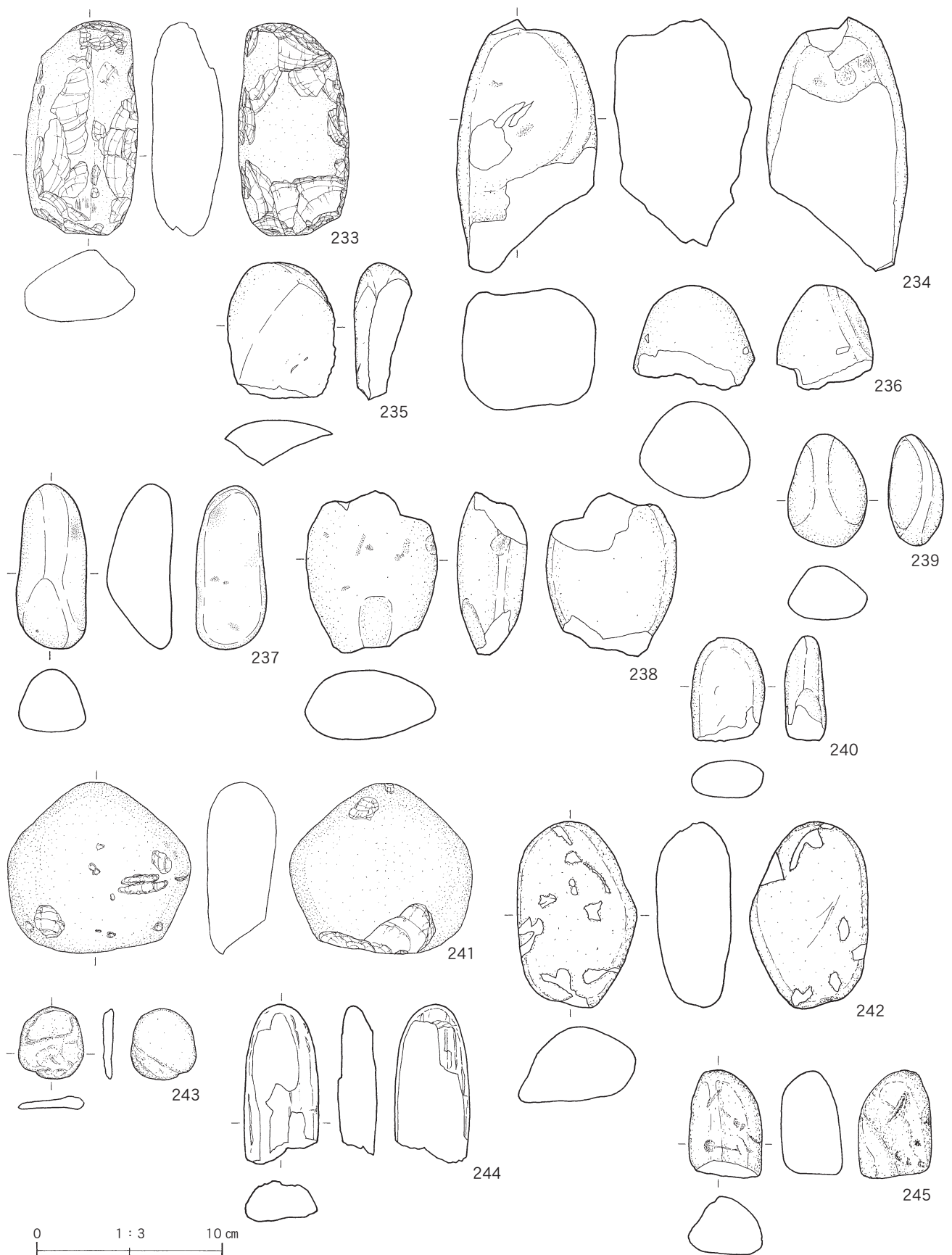
第255図 石器 (14)



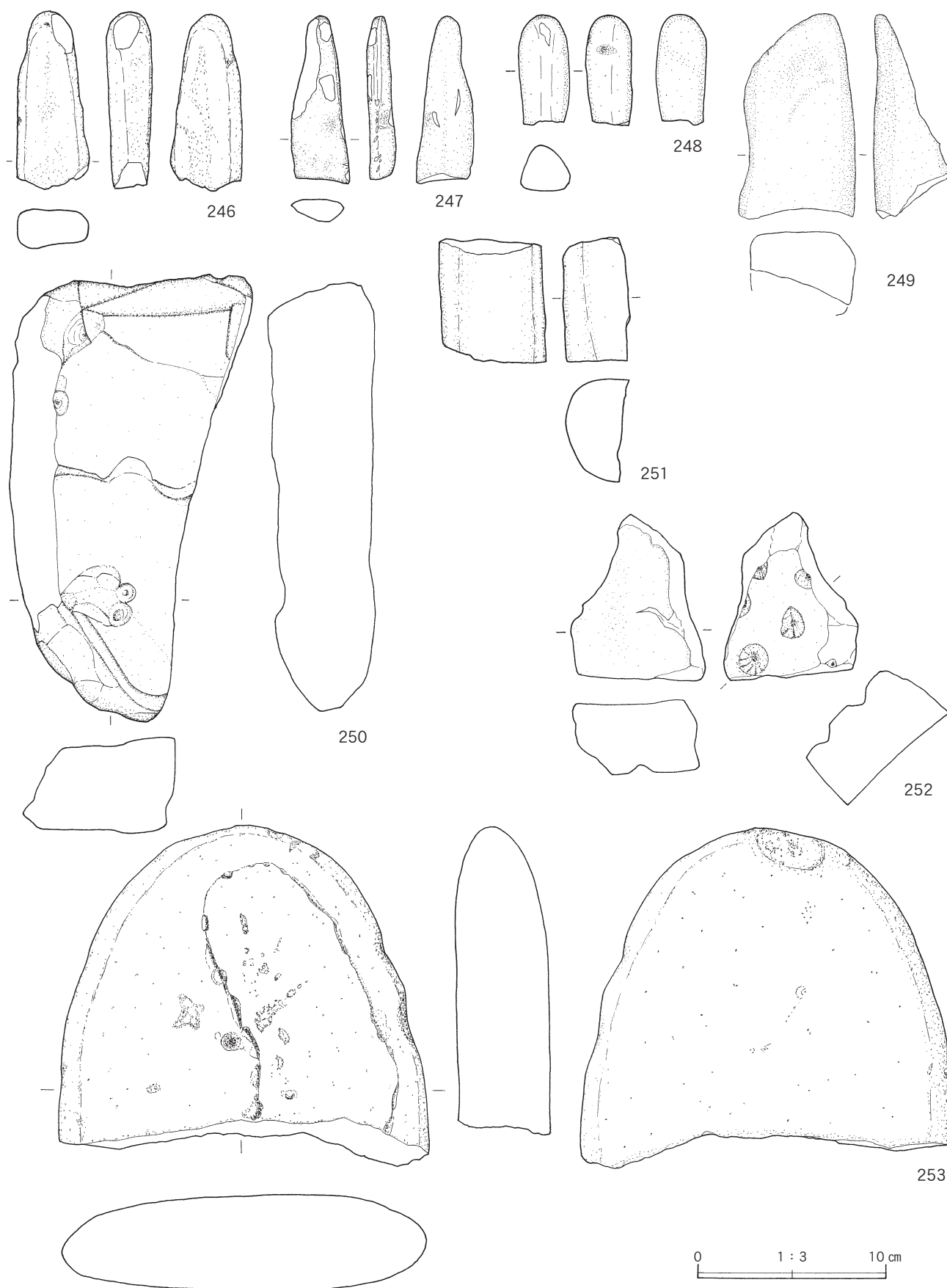
第256図 石器 (15)



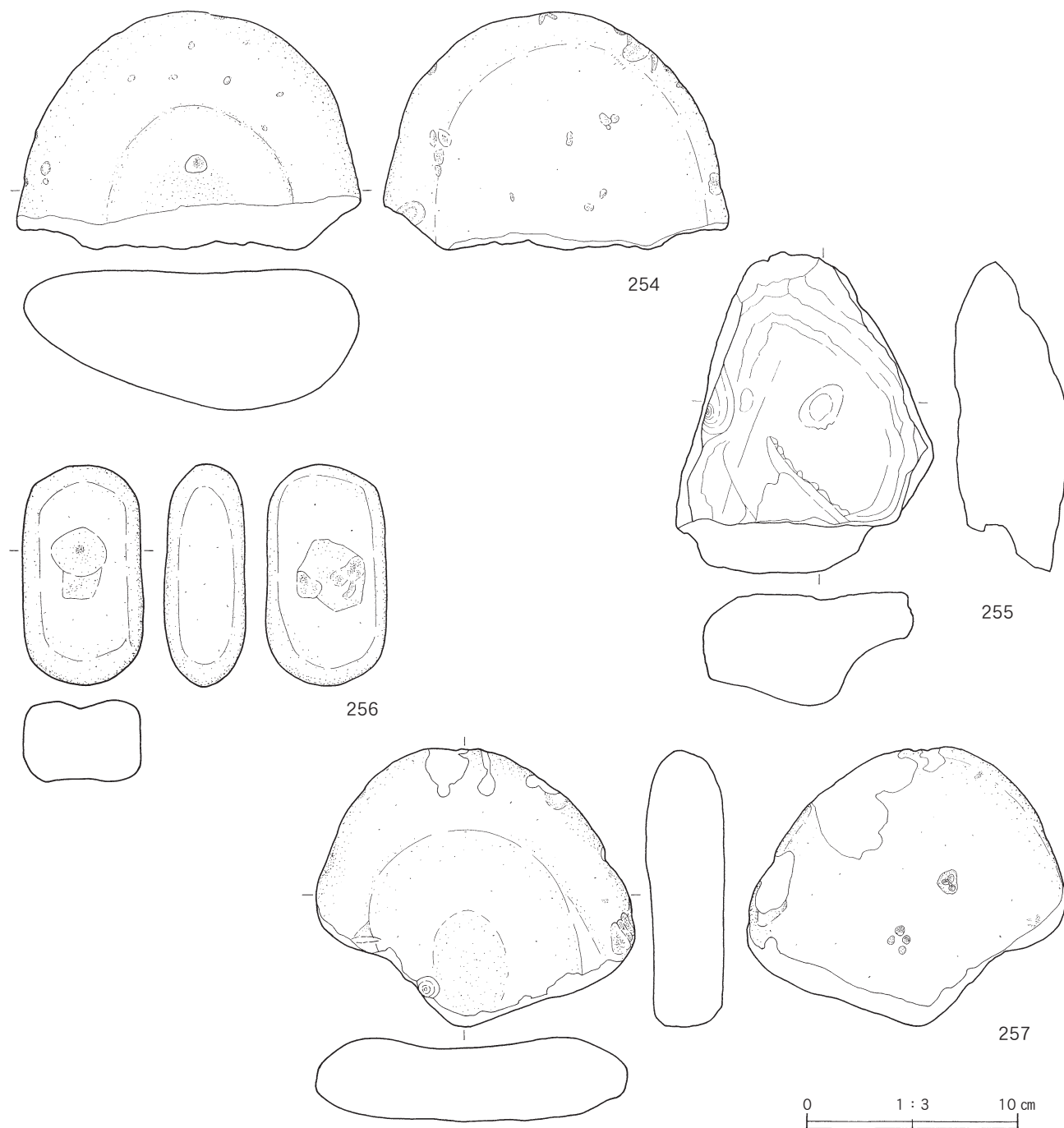
第257図 石器 (16)



第258図 石器 (17)



第259図 石器 (18)



第260図 石器 (19)

第38表 第4次調査出土石器観察表

No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	遺構・グリッド	注記No.	備 考
1	ナイフ形石器	3.4	1.0	0.6	2.5	チャート	SD2	17	
2	細石刃核	2.8	1.7	1.1	6.2	黒曜石	Ⅲ層		
3	細石刃核	3.8	1.8	1.1	5.1	黒曜石	Ⅲ層	178	
4	剥片	3.2	1.8	1.1	3.9	黒曜石	Ⅱ層	11	
5	細石刃核ブランク	1.5	2.3	1.8	4.7	黒曜石	Ⅲ層		
6	細石刃核ブランク	1.8	2.0	1.9	6.1	黒曜石	Ⅲ層		
7	石核	1.8	3.7	1.9	10.3	黒曜石	Ⅲ層	162	
8	使用痕のある剥片	3.9	1.9	0.8	8.5	黒曜石	SK3		
9	使用痕のある剥片	2.0	1.1	0.3	0.6	黒曜石	B トレンチ		
10	スクレーパー	2.8	4.1	1.6	14.6	黒曜石	SD2		
11	使用痕のある剥片	4.8	3.9	1.4	18.6	黒色頁岩	E トレンチ		
12	スクレーパー	4.1	7.1	0.8	26.1	黒色頁岩	Ⅲ層	13	
13	使用痕のある剥片	1.9	1.3	0.5	1.9	チャート	SD3	2	
14	剥片	3.1	1.6	0.6	3.4	黒曜石	Ⅲ層	42	
15	剥片	4.5	4.1	0.85	17.7	凝灰岩	1号クルミ塚	2	
16	スクレーパー	5.2	3.8	0.9	19.5	黒色頁岩	C5グリッドⅢ層		
17	石核	2.2	1.2	1.0	3.1	黒曜石	Ⅱb層	14	
18	使用痕のある剥片	5.2	4.2	0.7	19.4	ガラス質黒色安山岩	Cグリッドb2層	8	被熱
19	スクレーパー	3.6	3.9	1.5	20.5	ガラス質黒色安山岩	C5グリッドⅢ層		
20	石鏃	2.4	1.4	0.4	1.1	チャート	2号クルミ塚	1	
21	石鏃	2.5	1.6	0.4	1.3	チャート	2号クルミ塚	4	
22	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.9	チャート	2号クルミ塚	2	
23	石鏃	2.3	2.3	0.5	1.9	チャート	I b層砂道	16	
24	石鏃	1.9	1.4	0.5	0.8	チャート	C3グリッドⅡa層	81	
25	石鏃	2.6	1.5	0.3	0.7	チャート	E トレンチⅡb層	16	
26	石鏃	2.3	1.5	0.5	2.1	頁岩	Ⅱ層	44	
27	石鏃	2.6	1.8	0.5	2.9	チャート	Ⅱ層	85	平基
28	石鏃	2.6	1.4	0.4	1.2	チャート	D4グリッドⅡ層		側縁鋸歯状
29	石鏃	1.5	1.6	0.7	0.7	黒曜石	Ⅱ層	29	
30	石鏃	2.4	1.3	0.4	1.0	黒曜石	D4グリッドⅢ層	13	
31	石鏃	2.6	1.9	0.4	1.4	チャート	C4グリッドⅢ層	78	
32	石鏃	1.9	1.5	0.4	1.0	チャート	D4グリッドⅢ層	153	側縁鋸歯状
33	石鏃	2.6	1.8	0.4	1.1	頁岩	E4グリッドⅢ層	153	
34	石鏃	1.8	1.8	0.3	0.6	黒曜石	E4グリッドⅡ層	87	
35	石鏃	1.7	1.6	0.4	0.6	黒曜石	C5グリッドⅢ層	122	
36	石鏃	1.5	1.4	0.2	0.4	チャート	Ⅲ層	52	
37	石鏃	2.3	1.6	0.4	0.7	チャート	Ⅲ層	57	
38	石鏃	2.3	0.8	0.4	0.8	チャート	Ⅲ層骨の中	40	
39	石鏃	1.7	1.3	0.2	0.6	チャート	C5グリッド		
40	石鏃	1.4	1.1	0.2	0.4	チャート	Ⅱ層石	29	
41	石鏃	1.6	1.4	0.4	0.9	不明	Ⅲ層	32	平基
42	剥片	2.7	4.7	0.69	8.1	緑色岩	E4グリッドⅢ層	145	
43	石核	3.5	4.2	4.1	42.2	チャート	Ⅲ層		
44	剥片	3.7	3.7	0.7	8.0	チャート	C4グリッドⅢ層		
45	剥片	4.15	2.4	0.5	4.1	チャート	E4グリッドⅢ層	146	
46	石錐	3.4	2.8	0.7	7.7	黒色頁岩	C4グリッド	502	
47	剥片	3.9	2.0	1.2	9.6	チャート	C5グリッドⅢ層		
48	打製石斧	4.9	6.9	2.48	88.2	絹雲母片岩	2号クルミ塚	3	多孔石を再利用
49	石皿	7.5	10.6	5.6	494.7	安山岩	2号クルミ塚	6	
50	石核	5.0	7.4	6.2	325.0	ガラス質黒色安山岩	4号クルミ塚	1	
51	打製石斧	4.7	3.8	1.3	31.7	変成岩	SD4		
52	打製石斧	6.1	5.0	1.9	60.4	頁岩	6号クルミ塚	29	
53	敲打器	10.2	6.8	4.9	436.7	チャート	SD4	3	
54	打製石斧	4.7	4.4	1.0	26.1	頁岩	SK3	24	
55	磨石	9.0	3.3	3.8	125.8	緑色岩	SD4	17	
56	磨石	4.9	5.1	3.0	98.7	砂岩	6号クルミ塚	28	
57	石錘	6.0	3.9	2.8	82.8	安山岩	6号クルミ塚	27	
58	凹石	6.1	6.4	4.3	197.9	安山岩	SK4	1	
59	磨石	9.5	5.3	1.4	114.4	砂岩	SD4	11	
60	打製石斧	12.6	4.7	2.1	177.8	フォルンフェルス	SK3	38	短冊形
61	打製石斧	13.0	6.4	3.8	351.0	斑れい岩	SD4	1	
62	磨石	9.7	5.6	4.2	338.3	安山岩	SD4	21	
63	石皿	10.8	7.8	3.6	253.6	砂岩	SD4	30	

第Ⅳ章 低地の調査（第４次調査）

No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	遺構・グリッド	注記No.	備 考
64	敲打器	10.1	4.9	2.5	201.2	緑色岩	Ⅱa層	90	
65	打製石斧	8.65	8.0	2.1	183.3	頁岩	SD6	3	分銅形
66	磨石	8.1	4.1	3.5	204.0	安山岩	SD6	2	
67	敲打器	12.0	4.0	2.7	201.0	砂岩	SD6	1	敲打痕
68	石皿	8.2	6.5	1.8	136.3	緑色岩	SD6		
69	磨石	4.4	4.0	4.0	94.6	雲母片岩	SD6	4	敲打痕
70	磨石	8.9	3.6	3.08	156.4	安山岩	B4グリッドⅡa層ベルト		
71	凹石	10.2	7.5	4.5	389.2	砂岩	D3グリッドⅡa層	73	
72	磨石	12.25	3.5	2.0	116.2	緑色岩	B4グリッドⅡa層ベルト		
73	石皿	11.4	11.9	3.53	700.0	結晶片岩	Ⅱa層	92	
74	石皿	7.5	5.5	2.2	142.2	結晶片岩	Ⅱa層	809	
75	打製石斧	6.2	3.55	1.7	40.4	安山岩	Ⅰb層	10	
76	石皿	10.3	14.4	1.72	352.2	結晶片岩	Ⅱa層	91	
77	打製石斧	9.8	5.6	1.9	127.5	緑色岩	Ⅰb層砂道	6	
78	凹石	7.3	4.1	3.75	161.2	閃緑岩	D4グリッドⅠb層	18	
79	磨石	10.2	4.8	3.31	229.1	緑色岩	Ⅰb層砂道	8	
80	磨石	6.6	7.7	2.6	143.2	安山岩	Ⅰb層	26	
81	磨石	6.6	6.2	3.8	230.3	安山岩	Ⅰb層	2	
82	磨石	4.5	3.8	2.33	56.5	安山岩	Ⅰb層		
83	磨石	6.9	5.4	1.5	49.1	安山岩	Ⅰb層砂道		
84	磨石	3.8	3.95	1.8	22.5	安山岩	Ⅰb層	3	
85	磨石	4.9	2.77	2.45	35.6	安山岩	Ⅰb層砂道	13	
86	磨石	8.7	3.1	2.4	102.8	緑色岩	Ⅰb層	16	
87	磨石	7.4	8.0	5.6	474.2	閃緑岩	Ⅰb層砂道	10	
88	多孔石	9.2	5.7	1.9	161.8	絹雲母片岩	Ⅰb層	6	
89	磨石	7.3	6.6	3.88	214.7	ガラス質黒色安山岩	Ⅰb層	9	
90	スタンプ形石器	11.1	8.7	5.2	503.1	閃緑岩	C5グリッドⅡb層	21	
91	打製石斧	8.9	7.2	3.8	250.8	安山岩	Ⅱb層	10	
92	磨石	6.6	2.9	2.35	59.0	安山岩	Ⅱb層		
93	スクレーパー	5.6	3.35	0.94	19.5	安山岩	Ⅱb層	15	
94	磨石	10.1	8.7	3.8	504.3	閃緑岩	C3グリッドⅡb層	16	完形品
95	磨石	11.0	6.9	4.8	470.0	砂岩	Ⅱb層	17	
96	磨石	9.2	3.3	2.6	91.6	緑色岩	Ⅱb層	7	
97	磨石	9.3	3.6	3.4	158.1	ガラス質黒色安山岩	C4グリッドⅡb層	3	
98	磨石	5.4	3.9	4.0	112.1	閃緑岩	Ⅱb層	13	
99	磨石	4.7	2.9	2.85	61.0	石英	Ⅱb層	8	
100	磨石	3.2	2.7	3.3	35.6	砂岩	Ⅱb層	11	
101	打製石斧	13.4	6.0	3.3	313.6	砂岩	Ⅱ層	12	
102	打製石斧	9.0	7.5	3.5	258.3	砂岩	C3グリッドⅡ層	77	
103	打製石斧	5.95	2.9	0.85	17.9	フォルンフェルス	Ⅱ層	4	
104	磨製石斧	6.6	5.2	2.2	91.0	フォルンフェルス	Ⅱ層	82	刃部片
105	打製石斧	7.65	3.35	1.35	35.6	フォルンフェルス	Ⅱ層	26	
106	凹石	11.1	7.5	4.8	629.0	閃緑岩	D4グリッドⅡ層	84	
107	打製石斧	7.2	4.6	1.9	62.2	石灰岩	D4グリッドⅡ層	53	短冊形
108	磨石	5.6	7.6	4.7	228.5	安山岩	Ⅱ層	42	
109	磨石	15.2	8.7	4.6	950.0	閃緑岩	D4グリッドⅡ層	50	
110	磨石	11.6	3.65	3.2	209.4	緑色岩	D4グリッドⅡ層	63	
111	磨石	7.4	5.2	4.0	256.5	砂岩	Ⅱ層	5	
112	磨石	10.1	8.8	5.0	483.2	安山岩	Ⅱ層	33	
113	磨石	9.9	6.8	3.5	272.7	砂岩	Ⅱ層	7	
114	磨石	9.0	3.5	3.4	178.2	安山岩	Ⅱ層	45	
115	磨石	5.7	4.3	3.2	17.7	軽石	Ⅱ層	28	
116	磨石	9.7	6.3	3.5	231.2	閃緑岩	D4グリッドⅡ層	64	
117	磨石	7.5	6.9	3.3	227.5	閃緑岩	Ⅱ層	173	
118	磨石	5.5	5.8	5.1	185.3	安山岩	Ⅱ層	30	
119	磨石	5.5	2.9	1.75	37.0	安山岩	D4グリッドⅡ層	57	
120	磨石	9.8	5.2	2.4	210.0	緑色岩	Ⅱ層	34	
121	磨製石斧	10.9	4.9	3.85	288.2	緑色岩	Ⅱ層	2	
122	敲打器	10.4	3.2	10.3	181.6	緑色岩	Ⅱ層	25	両端敲打痕
123	磨石	6.0	4.8	3.2	84.1	安山岩	Ⅱ層	39	
124	磨石	5.75	3.85	3.50	108.4	結晶片岩	Ⅱ層	81	
125	打製石斧	10.9	6.9	1.9	134.0	フォルンフェルス	Ⅱ層	75	
126	石皿	12.2	20.1	4.4	1500.0	閃緑岩	D4グリッドⅡ層	66	
127	石皿	9.7	6.7	5.05	378.3	閃緑岩	Ⅱ層	22	
128	多孔石	9.6	7.8	5.66	290.0	安山岩	Ⅱ層	51	ロート状凹み

第2節 縄文時代の遺構と遺物

No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	遺構・グリッド	注記No.	備 考
129	打製石斧	10.1	7.4	3.1	220.0	砂岩	Ⅱ層	35	
130	打製石斧	5.4	4.8	2.6	44.6	安山岩	E4グリッドGⅢ層	113	
131	打製石斧	7.9	7.1	2.7	107.7	頁岩	D4グリッドⅢ層	14	
132	打製石斧	13.4	6.7	2.7	279.8	フォルンフェルス	C5グリッドⅢ層		
133	打製石斧	11.0	5.2	1.7	129.8	フォルンフェルス	Ⅲ層	175	
134	打製石斧	7.2	7.7	4.6	268.2	ガラス質黒色安山岩	C4グリッドⅡb層	2	
135	打製石斧	8.7	7.3	4.4	348.1	砂岩	C5グリッドⅢ層SD3	177	
136	敲打器	8.0	5.4	5.36	420.0	安山岩	Ⅲ層	109	
137	打製石斧	9.2	7.6	4.22	340.0	安山岩	C4グリッドⅢ層	73	
138	打製石斧	7.8	3.4	1.6	35.7	緑泥片岩	Ⅲ層	42	多孔石の転用
139	打製石斧	7.7	7.2	2.4	136.6	安山岩	Ⅲ層	134	スクレーパーへ転用か
140	打製石斧	5.5	4.2	0.94	32.1	頁岩	Ⅲ層	22	
141	打製石斧	10.5	8.0	2.6	282.0	フォルンフェルス	C4グリッドⅢ層	7	
142	打製石斧	8.5	6.3	2.0	149.3	フォルンフェルス	Ⅲ層	59	
143	打製石斧	4.4	5.8	2.1	128.1	頁岩	C5グリッドⅢ層		
144	打製石斧	6.7	6.0	2.9	131.3	フォルンフェルス	D4グリッドⅢ層	8	
145	打製石斧	7.45	6.15	3.05	148.0	砂岩	D4グリッドⅢ層	1	
146	打製石斧	8.3	4.6	2.3	114.6	フォルンフェルス	C4、C5グリッドⅢ層	157	
147	打製石斧	11.5	5.0	3.2	255.7	砂岩	D4グリッドⅢ層	15	
148	打製石斧	6.2	10.6	3.66	309.9	砂岩	Ⅲ層	48	先端部
149	打製石斧	5.5	5.8	1.9	69.8	頁岩	C5グリッドⅢ層		
150	打製石斧	11.7	9.0	5.3	480.1	緑色岩	D4グリッドⅢ層	3	
151	打製石斧	8.7	8.6	3.2	312.0	砂岩	C4グリッドⅢ層		
152	打製石斧	3.4	3.8	0.6	17.8	形質凝灰岩	Ⅲ層	87	
153	打製石斧	8.4	4.9	1.3	46.6	フォルンフェルス	D4グリッドⅢ層	2	
154	打製石斧	8.6	7.5	1.4	135.8	石墨片岩	Ⅲ層	835	
155	打製石斧	4.7	4.3	2.2	35.2	粘板岩	Ⅲ層	31	
156	打製石斧	12.1	3.0	1.05	55.5	緑泥片岩	Ⅲ層	31	
157	打製石斧	14.9	4.0	1.87	116.4	緑泥片岩	Ⅲ層	41	
158	石皿	9.5	11.3	2.7	363.9	結晶片岩	C5グリッドⅢ層		
159	打製石斧	5.6	4.5	1.4	50.5	フォルンフェルス	E4グリッドⅢ層	147	
160	打製石斧	7.0	3.3	1.4	39.9	フォルンフェルス	B5グリッドⅢ層	63	
161	磨製石斧	13.7	4.9	2.7	285.9	緑色岩	C4グリッドⅢ層	91	
162	剥片	5.2	5.5	1.1	41.9	フォルンフェルス	D4グリッドⅢ層	156	横長剥片
163	石核	3.9	5.3	2.0	35.5	ガラス質黒色安山岩	C5グリッドⅢ層		
164	打製石斧	5.8	3.5	1.65	28.8	砂岩	Ⅲ層	138	
165	打製石斧	6.8	4.3	1.6	58.9	緑色岩	E4グリッドⅢ層		
166	石皿	12.2	8.9	6.22	850.0	閃緑岩	Ⅲ層	18	
167	磨製石斧	7.7	5.5	4.4	235.3	緑色岩	B4グリッドⅢ層	23	
168	磨石・敲打石	4.1	3.8	3.71	88.2	安山岩	Ⅲ層	13	
169	磨石・敲打石	10.4	4.0	4.0	220.0	安山岩	C4グリッドⅢ層	140	
170	磨石・敲打石	6.2	5.2	2.9	112.2	緑色岩	Ⅲ層	19.123	
171	凹石	10.2	7.9	5.3	650.5	砂岩	E4グリッドⅢ層SK4	144	
172	磨石・敲打石	3.1	2.0	1.0	8.9	泥岩	Ⅲ層	32	
173	磨石・敲打石	8.6	7.6	6.8	625.0	閃緑岩	Ⅲ層	107	
174	磨石・敲打石	4.7	4.3	3.6	83.8	安山岩	B4グリッドⅢ層	20	
175	磨石・敲打石	6.2	4.6	5.4	164.2	ガラス質黒色安山岩	C4グリッドⅢ層	98	
176	磨石・敲打石	3.0	3.4	2.12	27.4	安山岩	C5グリッドⅢ層		
177	磨石・敲打石	4.6	3.8	3.4	68.5	安山岩	E5グリッドⅢ層		
178	磨石・敲打石	4.6	6.0	6.0	127.1	安山岩	C4グリッドⅢ層	72	
179	磨石・敲打石	5.6	6.8	3.8	178.8	角閃石安山岩	C4グリッドⅢ層	76	
180	磨石・敲打石	6.0	4.5	2.0	86.1	砂岩	C4、C5グリッドⅢ層	163	
181	磨石・敲打石	6.5	6.4	4.5	226.8	安山岩	Ⅲ層	20	
182	磨石・敲打石	5.9	6.4	3.8	198.4	頁岩	C4グリッドⅢ層	97	
183	磨石・敲打石	4.2	5.8	3.3	115.1	花崗岩	B5グリッドⅢ層	62	
184	磨石・敲打石	6.0	3.1	1.9	49.8	砂岩	C4グリッドⅢ層	88	
185	磨石・敲打石	3.8	1.6	1.28	10.1	安山岩	C4グリッドⅢ層		
186	磨石・敲打石	15.8	5.8	3.04	430.6	閃緑岩	D4、D5リッドⅢ層	174	完形品
187	磨石・敲打石	10.8	5.8	3.7	401.5	閃緑岩	D4グリッドⅢ層	10	完形品
188	磨石・敲打石	8.9	3.5	2.28	116.4	緑色岩	C4グリッドⅢ層	84	
189	磨石・敲打石	7.5	2.7	2.9	79.1	砂岩	B5グリッドⅢ層	66	
190	磨石・敲打石	8.6	4.0	2.4	84.4	砂岩	C5グリッドⅢ層	129	
191	磨石・敲打石	12.1	5.2	4.6	463.3	安山岩	D4、D5グリッドⅢ層	173	
192	磨石・敲打石	6.0	7.3	4.8	299.2	安山岩	D4グリッドⅢ層	19	
193	磨石・敲打石	10.9	8.9	4.9	640.0	安山岩	B4グリッドⅢ層	24	

第Ⅳ章 低地の調査（第４次調査）

No.	器 種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石 材	遺構・グリッド	注記No.	備 考
194	磨石・敲打石	6.0	3.4	5.3	53.0	安山岩	C4グリッドⅢ層		
195	磨石・敲打石	5.5	2.4	2.4	35.6	安山岩	C5グリッドⅢ層		
196	磨石・敲打石	5.8	3.65	3.3	74.6	安山岩	C4グリッドⅢ層	93	
197	磨石	10.8	4.9	2.9	160.0	礫岩	Ⅲ層	83	
198	磨石	9.3	3.1	2.5	85.9	チャート	C4グリッドⅢ層	90	
199	磨石	3.5	2.9	1.9	20.7	安山岩	E4グリッドⅢ層		
200	磨石	4.0	6.8	4.0	137.6	安山岩	Ⅲ層	171	
201	多孔石	7.75	4.25	2.4	113.7	緑泥片岩	C4グリッドⅢ層	92	
202	凹石	5.4	8.6	4.29	268.1	閃緑岩	Ⅲ層	49	
203	凹石	6.4	6.8	4.6	241.2	安山岩	Ⅲ層	105+103	
204	多孔石	9.4	5.3	2.4	146.0	緑泥片岩	Ⅲ層	81	
205	凹石	9.4	6.9	3.2	120.7	安山岩	B4グリッドⅢ層	25	
206	磨石・敲打石	4.6	7.2	2.7	125.9	砂岩	Ⅲ層	7、14	
207	石核	10.6	7.0	5.6	88.3	安山岩	D4グリッドⅢ層	157	凹石か
208	多孔石	10.45	7.4	1.8	193.3	緑泥片岩	D4グリッドⅢ層	5	
209	台石	26.7	12.1	8.04	1270.0	砂岩	Ⅲ層	111	
210	石皿	11.3	12.6	5.21	790.0	安山岩	C4グリッドⅢ層	79	
211	磨製石斧	6.8	4.4	2.95	137.1	緑色岩	C5グリッドSD3 b2層	3	
212	磨製石斧	9.7	5.1	1.63	128.7	緑色岩	D5グリッド b3	1	
213	打製石斧	9.5	7.8	3.3	360.9	ガラス質黒色安山岩	SD3	14	
214	打製石斧	5.8	5.2	1.56	47.7	砂岩	SD3	8	大型
215	スクレーパー	8.65	4.7	1.9	74.2	安山岩	SD3	1	横長剥片を素材
216	打製石斧	10.6	7.5	2.8	266.2	フォルンフェルス	SD2	25	刃部再生
217	打製石斧	12.45	2.85	2.1	109.4	緑色岩	SD2	23	
218	打製石斧	14.3	4.5	2.9	231.7	石墨片岩	SD2	26	細身、刃部欠損
219	打製石斧	6.5	5.7	3.0	128.1	安山岩	C4グリッドSD2		
220	打製石斧	5.1	4.6	1.6	57.8	フォルンフェルス	D4グリッドSD2		
221	敲打器	6.8	5.5	2.3	113.0	砂岩	E4グリッド		
222	打製石斧	4.4	3.2	1.15	27.6	砂岩	C4グリッド		
223	スクレーパー	8.3	4.7	2.05	96.7	ガラス質黒色安山岩	SD2		
224	スクレーパー	7.2	3.8	1.0	26.5	安山岩	SD2	28	
225	打製石斧	9.6	3.6	1.07	55.2	緑泥片岩	C5グリッド		
226	石核	8.2	5.9	5.2	191.3	砂岩	SD2	7	
227	敲打器	12.7	4.5	2.5	217.6	砂岩	一括		
228	敲打器	8.2	4.45	3.7	206.8	砂岩	SD2	8	敲打痕
229	打製石斧	7.1	3.5	1.2	37.7	安山岩	C4グリッド	158	
230	磨製石斧	3.6	3.2	1.3	48.9	緑色岩	D5グリッド		
231	磨製石斧	7.0	5.4	2.5	78.3	緑色岩	一括		
232	凹石	8.0	5.25	2.4	118.5	砂岩	E トレンチ		
233	打製石斧	11.5	6.00	3.8	409.0	緑色岩	SD2	1	
234	敲打器	13.7	7.7	6.83	920.0	緑色岩	SD2	3	敲打痕
235	磨石	7.4	5.9	2.7	129.8	緑色岩	SD2	33	
236	磨石	5.5	6.4	5.1	154.5	安山岩	SD2	4	
237	磨石	8.9	3.3	3.4	155.2	安山岩	SD2	22	
238	磨石	8.8	7.1	3.84	265.9	安山岩	C5グリッド	130	
239	磨石	6.0	4.3	3.0	86.6	安山岩	B トレンチ		
240	磨石	5.6	4.0	2.2	60.9	砂岩	SX2		
241	磨石	9.3	9.9	3.75	520.0	安山岩	E4グリッド	5	
242	磨石	11.0	6.45	4.1	345.4	チャート	B4グリッド		
243	磨石	3.8	3.5	0.6	11.6	結晶片岩	D5グリッド		
244	磨石	8.6	4.1	2.12	101.7	絹雲母片岩	D トレンチ		
245	磨石	4.0	5.7	3.34	101.8	安山岩	D トレンチ		
246	敲打器	9.4	3.8	2.3	146.6	緑色岩	SD2	29	
247	摩石	9.0	3.2	1.2	40.1	緑色岩	D トレンチ		
248	敲打器	5.9	2.6	2.5	160.7	緑色岩	SD2	38	
249	石皿	10.85	6.25	4.2	248.4	安山岩	SD2	9	
250	多孔石	24.0	13.0	5.7	12.26	緑泥片岩	一括	3	
251	石皿	6.6	(5.7)	(3.5)	189.2	安山岩	SD2	35	
252	多孔石	8.8	7.0	4.3	245.2	安山岩	D トレンチ		
253	多孔石	18.1	19.8	5.0	2080.0	閃緑岩	E4グリッド		
254	多孔石	11.3	16.5	6.5	1170.0	安山岩	一括		
255	多孔石	15.3	12.35	5.35	1400.0	緑泥片岩	C5グリッド		
256	凹石	10.5	5.8	3.9	410.0	安山岩	一括		
257	多孔石	13.2	15.4	4.1	1200.0	閃緑岩	一括		

(11) 土製品 (第262・263図、第39表)

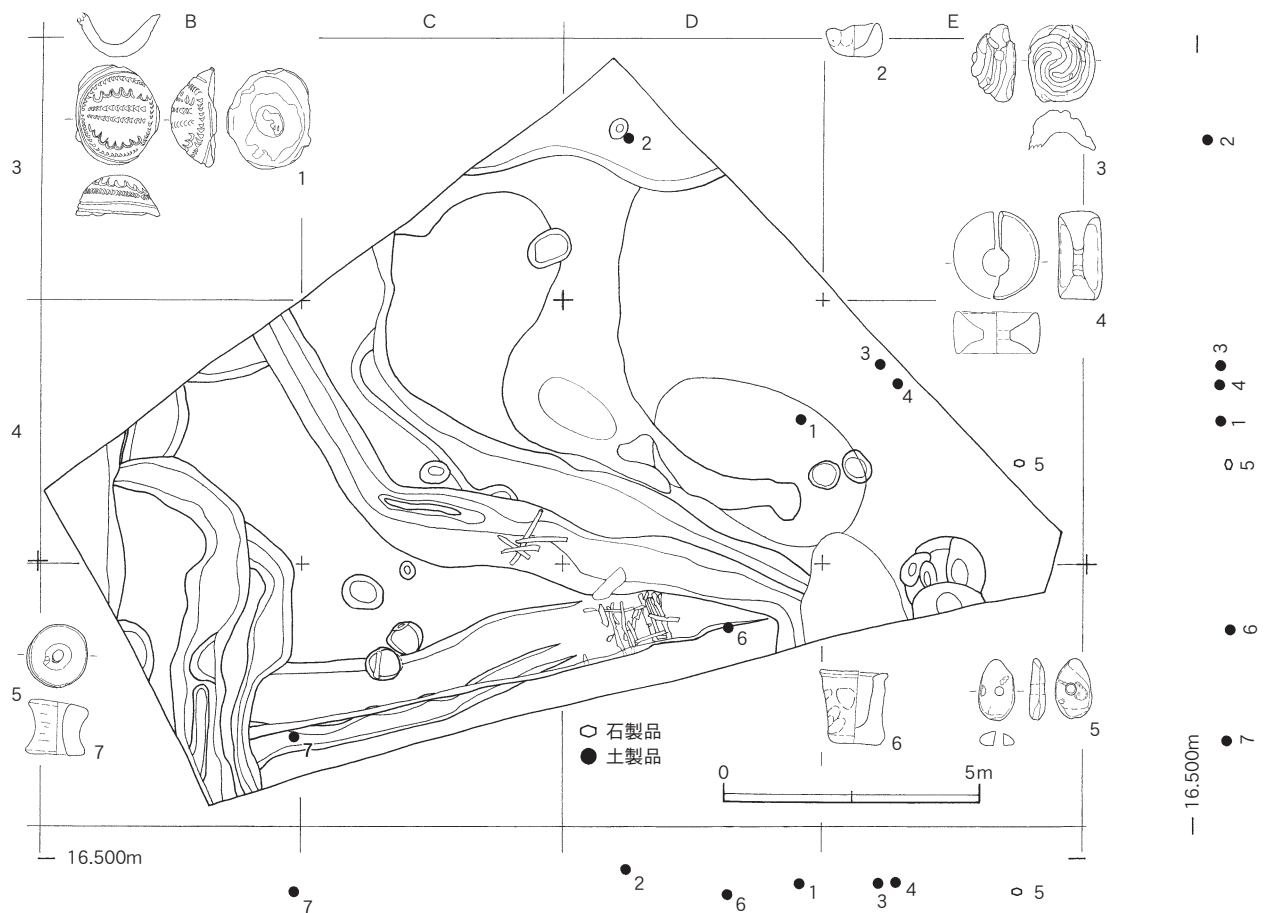
1、2はクルミ形土製品である。1は6号クルミ塚より出土した。形状は楕円形を呈し、表面は半裁竹管による連続した刺突列と三角押文を周辺及び中央部に施す。断面は半円形で、端部がやや反って実際のクルミ核の縫合線を模倣する。内面は楕円形に窪み、赤彩痕が認められる。2はⅡb層中から出土した。1よりも小型で、実際のクルミ核のサイズに合わせて作られている。表面は沈線と隆帯により入り組み状に文様を施している。断面は半円形を呈し、端部は縫合線を模して反る形態である。

3は臼形の耳飾りで、3号土坑から出土した。無文であり中央部を穿孔し、上下の側縁が張り出す形状である。

4は小型の手づくね土器である。楕円形の粘土塊の中央部を押し込み、指頭により口縁部を成形する。5はミニチュア土器である。4と同様に表面は指頭により成形される。形状は円筒形を呈し、口唇部は外側に突出して赤彩される。

6は土製の袂状耳飾である。左半部は欠失する。形状は円形を呈し、中央部に向かって厚さを減じ、断面は三角形を呈する。Ⅱb層中から出土している。

7～74は土製円板である。図示したものは67点で、いずれも土器片の周辺を加工して円形としている。このうち遺構出土の土製円板は17点である。全体の傾向としては無文土器が多く、これらの多くは浅鉢形土器の下半部が加工された可能性が高い。なお、土製品の各法量、重量等については第39表にまとめた。



第261図 土製品・石製品分布図

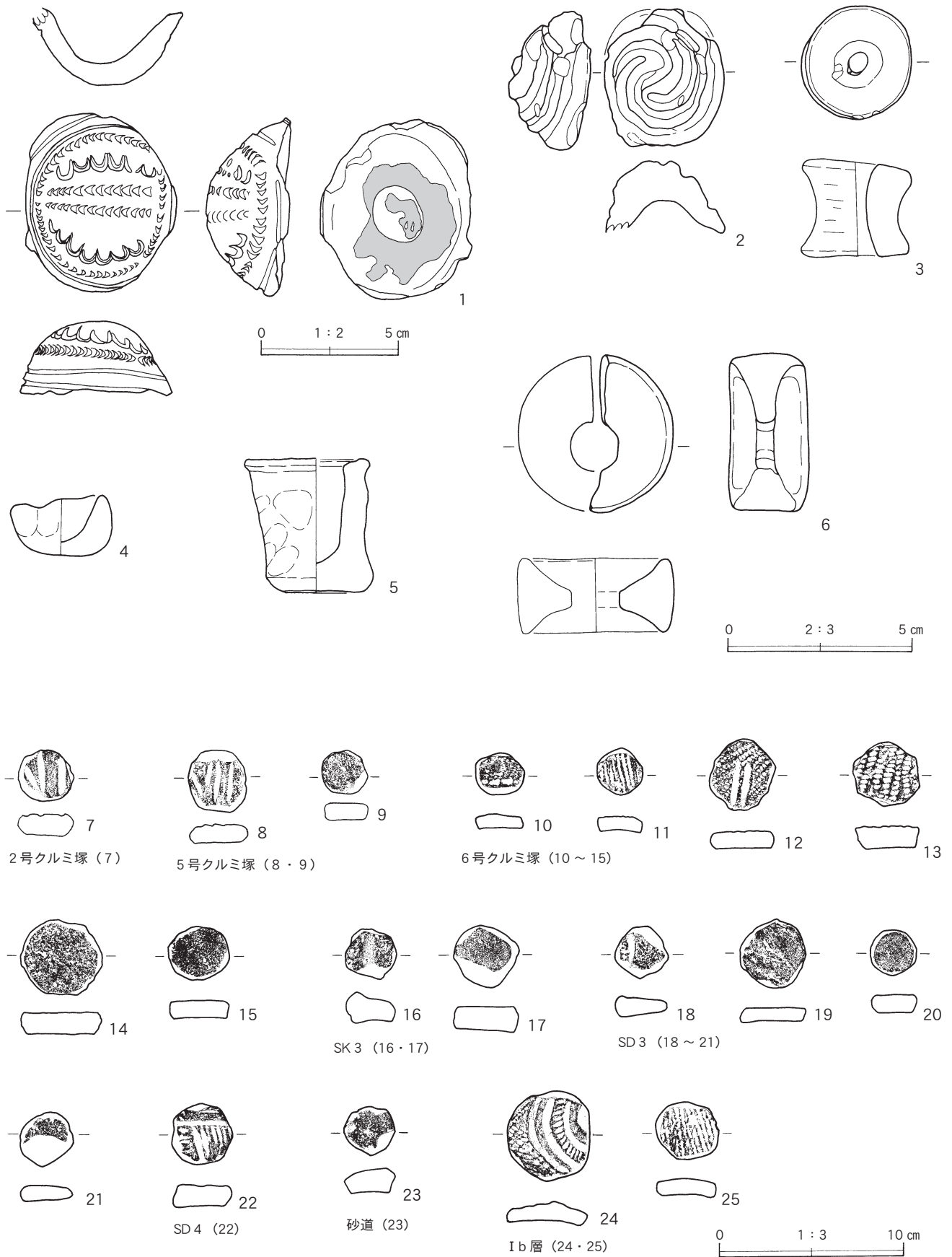
第39表 第４次調査土製品観察表

図版番号	製品名	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第262図 1	クルミ形土製品	6.6	5.4	3.1	53.1	D4 グリッド
第262図 2	クルミ形土製品	3.8	3.3	2.1	15.2	E4 グリッド
第262図 3	耳飾	2.7	2.1	3.0	20.9	B5 グリッド
第262図 4	ミニチュア土器	2.8	1.6	—	9.3	D3 グリッド
第262図 5	ミニチュア土器	5.1	3.5	—	35.4	D5 グリッド
第262図 6	挟状耳飾	4.3	(1.5)	2.1	15.3	E4 グリッド
第262図 7	土製円板	2.7	3.0	1.2	11.8	2 号クルミ塚-15
第262図 8	土製円板	3.2	3.0	0.9	11.6	5 号クルミ塚-20
第262図 9	土製円板	2.2	2.5	0.8	6.6	
第262図10	土製円板	2.2	2.6	0.8	4.8	6 号クルミ塚
第262図11	土製円板	2.5	2.4	0.7	5.5	
第262図12	土製円板	3.8	3.4	0.9	15.3	
第262図13	土製円板	3.4	3.6	1.3	18.5	
第262図14	土製円板	3.9	4.3	1.2	28.3	
第262図15	土製円板	2.9	3.4	0.9	11.7	
第262図16	土製円板	2.4	2.7	1.7	10.4	SK3-88
第262図17	土製円板	3.3	3.5	1.4	17.3	132
第262図18	土製円板	2.7	2.8	1.2	8.8	SD3
第262図19	土製円板	3.6	3.6	0.9	14.1	
第262図20	土製円板	2.4	2.5	1.1	7.7	
第262図21	土製円板	2.7	2.9	0.9	7.0	
第262図22	土製円板	3.2	3.2	1.2	16.0	SD4
第262図23	土製円板	2.5	2.7	1.3	9.4	砂道跡
第262図24	土製円板	4.9	4.5	1.2	28.3	I b 層
第262図25	土製円板	3.1	3.4	0.9	10.6	
第263図26	土製円板	3.4	3.4	0.9	13.9	Ⅱ 層
第263図27	土製円板	3.0	3.0	1.0	10.3	
第263図28	土製円板	3.1	3.1	1.2	16.2	
第263図29	土製円板	3.7	4.0	1.3	18.4	
第263図30	土製円板	3.8	4.0	1.1	24.5	
第263図31	土製円板	4.0	4.1	1.2	24.7	
第263図32	土製円板	2.8	2.9	0.9	10.7	
第263図33	土製円板	2.6	2.9	1.2	11.2	
第263図34	土製円板	3.6	3.5	1.3	19.2	Ⅱ a 層
第263図35	土製円板	2.8	3.0	1.2	13.2	
第263図36	土製円板	2.9	3.2	1.0	11.6	Ⅱ b 層

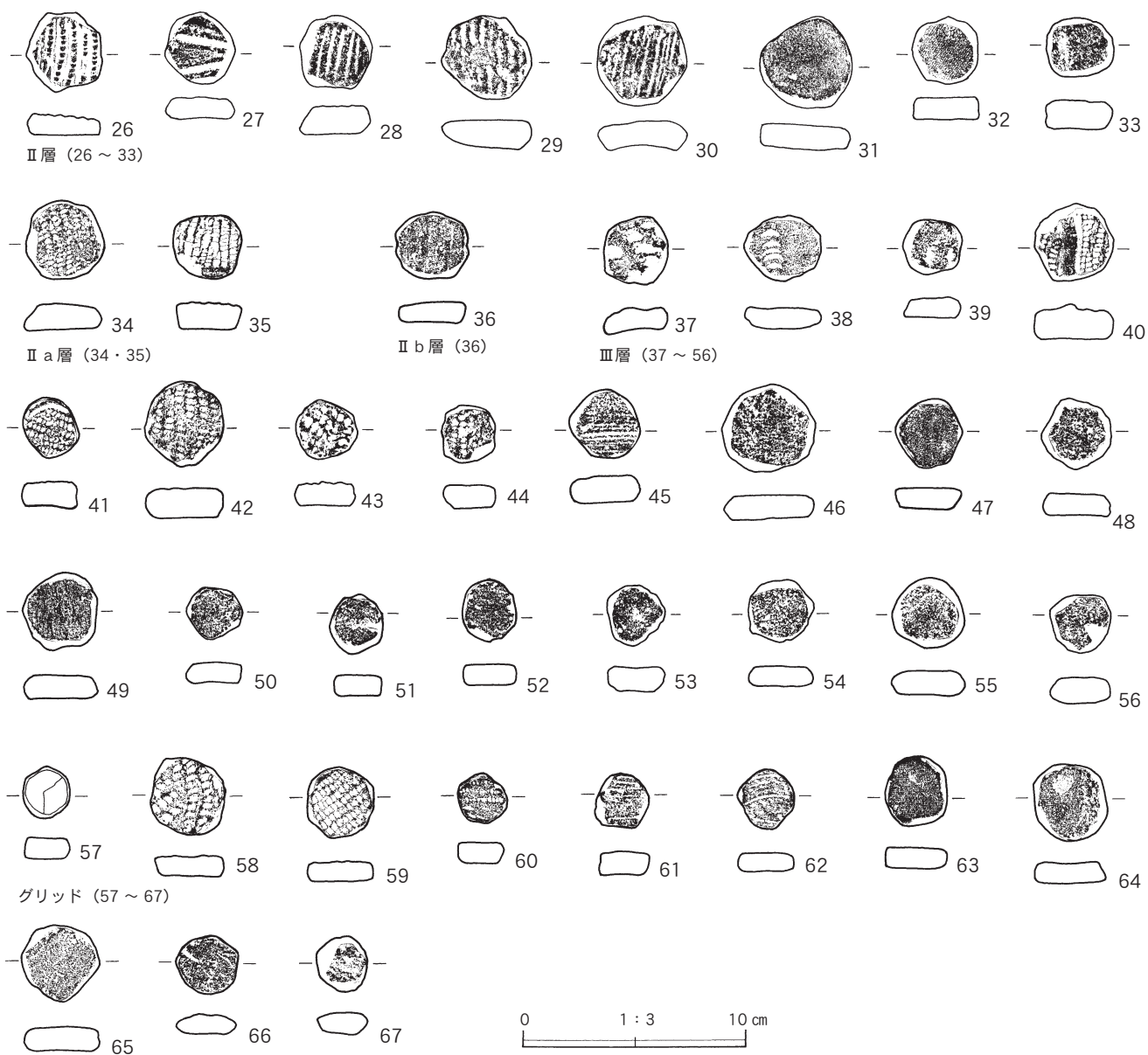
図版番号	製品名	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第263図37	土製円板	3.0	2.9	0.9	8.9	Ⅲ層
第263図38	土製円板	2.8	3.4	0.9	9.5	—
第263図39	土製円板	2.5	2.7	0.9	7.4	D5グリッド
第263図40	土製円板	3.3	3.5	1.5	19.8	E4グリッド
第263図41	土製円板	2.7	2.4	1.1	10.0	C5グリッド
第263図42	土製円板	3.8	3.4	1.3	21.0	C5グリッド
第263図43	土製円板	2.6	2.8	1.1	9.6	C5グリッド
第263図44	土製円板	2.5	2.3	1.0	7.4	C5グリッド
第263図45	土製円板	3.1	3.2	1.1	12.7	C5グリッド
第263図46	土製円板	3.7	4.1	1.0	20.6	E4グリッド
第263図47	土製円板	3.0	2.8	0.9	10.3	C5グリッド
第263図48	土製円板	2.9	3.0	1.1	11.6	D4グリッド
第263図49	土製円板	3.2	3.3	0.9	13.0	—
第263図50	土製円板	2.3	2.6	0.9	6.0	B5グリッド
第263図51	土製円板	2.5	2.4	0.9	7.0	B5グリッド
第263図52	土製円板	2.7	2.5	0.9	7.3	B5グリッド
第263図53	土製円板	2.7	2.6	1.1	9.0	B5グリッド
第263図54	土製円板	2.7	2.9	0.9	8.1	B4グリッド
第263図55	土製円板	3.0	3.2	1.1	12.2	B5グリッド
第263図56	土製円板	2.5	2.7	1.1	8.9	B5・C5
第263図57	土製円板	2.2	2.0	1.0	5.6	C4グリッド
第263図58	土製円板	3.5	3.5	1.0	14.6	B5グリッド
第263図59	土製円板	3.2	3.0	0.9	12.0	C4グリッド
第263図60	土製円板	2.2	2.2	1.0	5.5	Bトレンチ
第263図61	土製円板	2.5	2.4	1.0	7.2	D4 D5グリッド
第263図62	土製円板	2.7	2.6	0.9	6.8	Bトレンチ
第263図63	土製円板	3.1	2.8	1.1	11.5	B5グリッド
第263図64	土製円板	3.5	3.2	1.0	14.9	D3グリッド
第263図65	土製円板	3.4	3.5	1.1	15.0	B5グリッド
第263図66	土製円板	2.8	2.5	0.8	5.6	C5グリッド
第263図67	土製円板	2.4	2.3	1.0	6.3	Bトレンチ

第40表 第4次調査石製品観察表

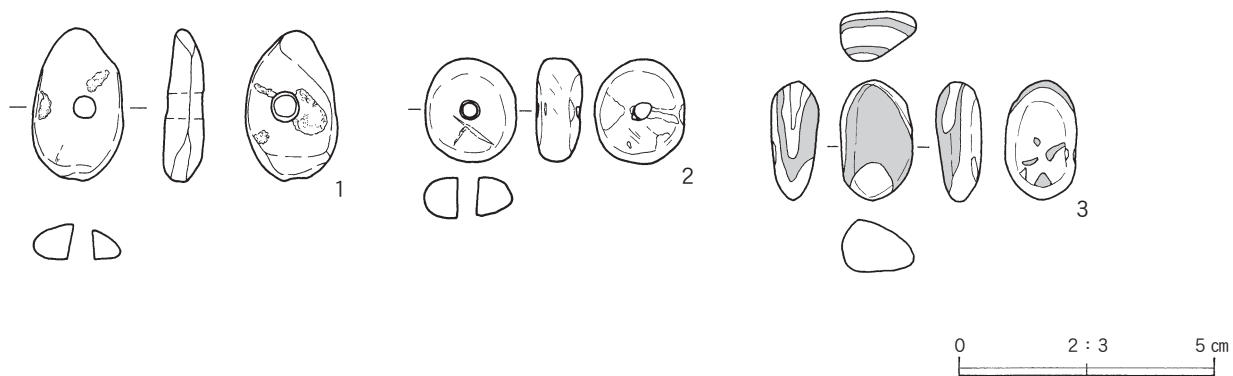
図版番号	製品名	石材	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	出土位置
第264図1	大珠	ヒスイ	3.0	11.3	7.8	6.7	E4グリッド
第264図2	白玉	滑石	2.13	1.9	1.1	5.5	C5グリッド
第264図3	赤彩石製品	礫岩	2.4	1.4	0.9	4.1	D4・E4グリッド



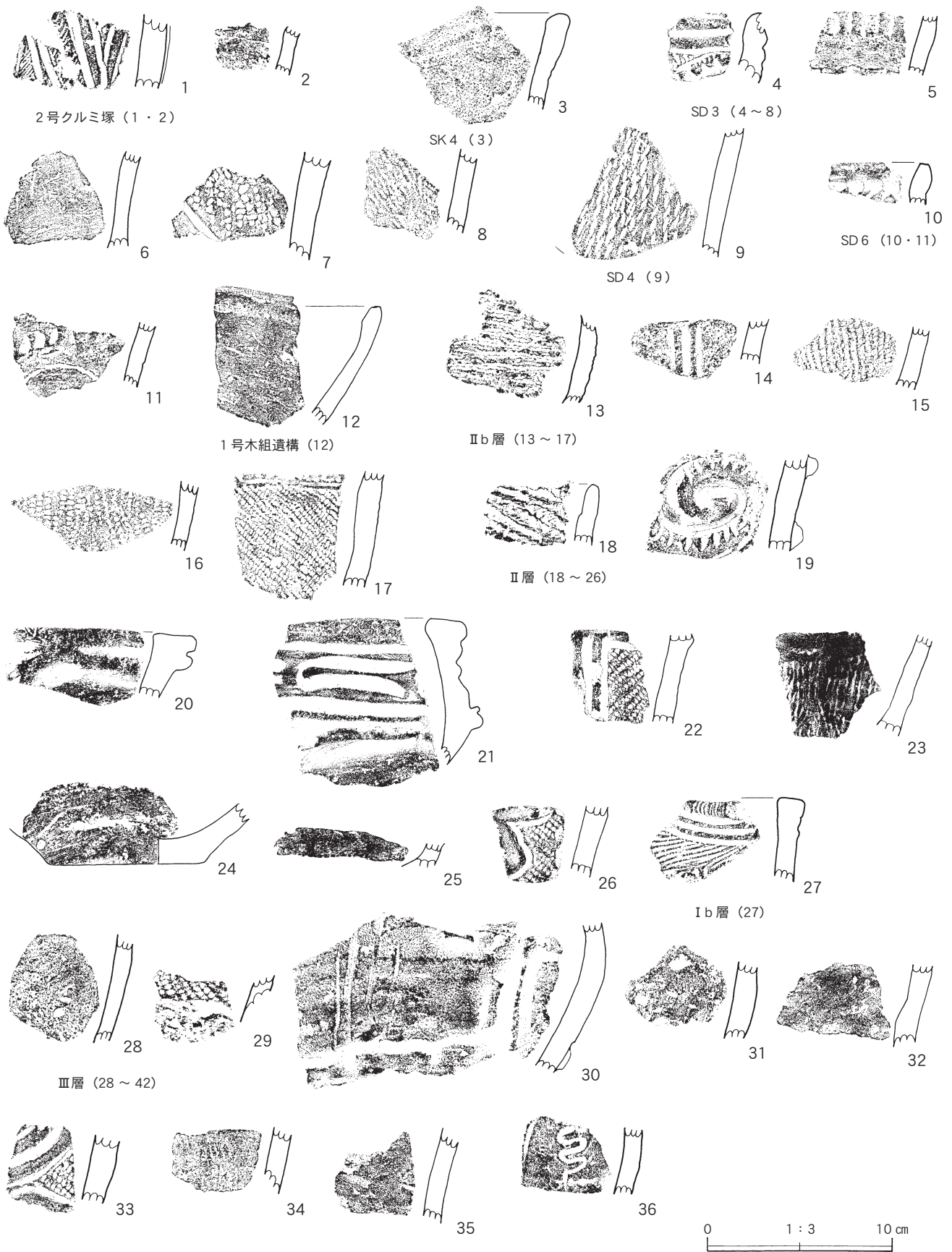
第262図 土製品 (1)



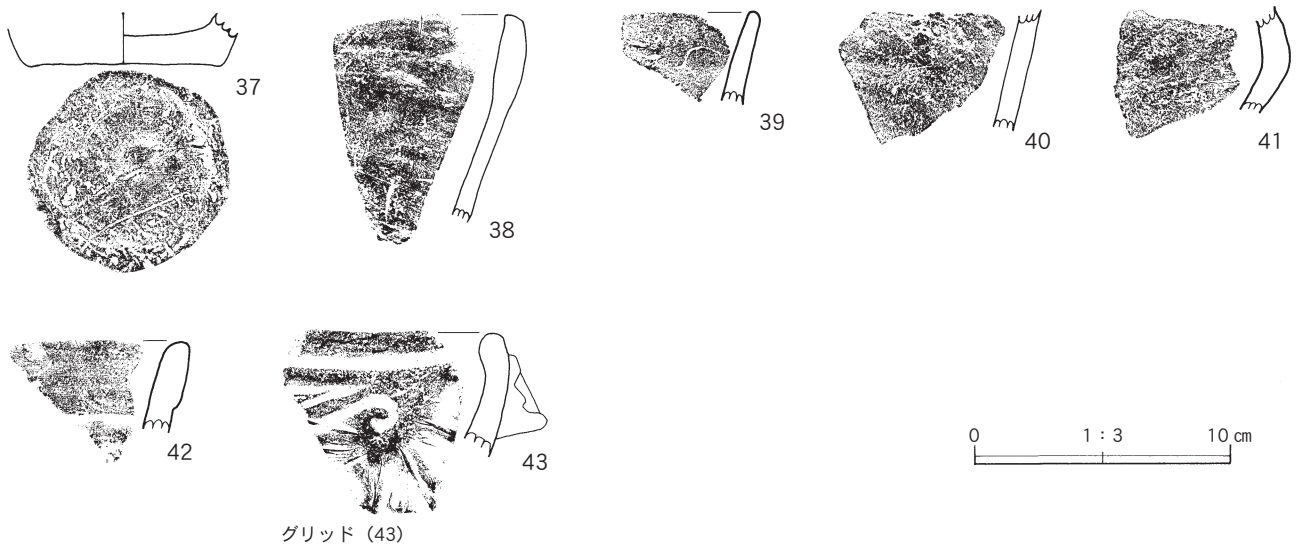
第263図 土製品 (2)



第264図 石製品



第265図 圧痕土器 (1)



第266図 圧痕土器（2）

(12) 石製品（第264図、第40表）

1は硬玉製の犬珠である。E4グリッドのⅡb層中から出土した。楕円形の円礫の中央部に穿孔され、裏面から表面へ貫通している。全体的によく磨かれている。

2は滑石性の白玉で、円礫は断面が矩形に成形されており、中央部に穿孔される。C5グリッドから検出された。

3は楕円形の自然礫に赤漆を塗彩する。側縁から表面に向かって、全体的に波状を呈するモチーフを横位に描いている。

(13) 圧痕土器（第265・266図）

ここでは圧痕が確認された土器を一括掲載し、各土器の圧痕については第Ⅵ章第5節に掲載した。

1、2は2号クルミ塚出土の土器である。1は勝坂Ⅲ式で、刻みのある隆帯が斜位に垂下して区画文を描く。2は阿玉台式の土器である。

3は4号土坑出土の土器である。阿玉台式土器の突起部で、波頂部は刻みが施され二股である。

4～8は3号溝跡出土の土器である。4は勝坂Ⅲ式土器で、弧状の隆帯に交互短沈線を施し、半裁竹管による横位の隆帯で区画文を描く。5は阿玉台式の胴部片で、刻目文が横位に施される。6は加曾利E式の頸部片と想定される。7、8は加曾利E式の深鉢形土器の胴部片である。7は沈線による磨消懸垂文が描かれる。

9は4号溝跡出土の土器で、加曾利E式の深鉢形土器である。地文に撚糸文を施す。

10、11は6号溝跡出土の土器である。10は口縁部の肥厚部に沿って、半裁竹管による刺突文を施す。勝坂式であろう。11は阿玉台Ⅰb式の土器である。有節沈線による弧状のモチーフの直下に刻目文を横位に施す。

12は1号木組遺構出土の土器で、浅鉢形土器である。無文であるが胎土に雲母粒子を多く含む。阿玉台式土器と想定される。

13～17はⅡb層出土の土器である。13は附加条縄文により施文する土器で、黒浜式である。14は加曾利EⅠ式の土器で、平行隆帯による懸垂文を施す。15～17は加曾利E式の土器で、15は撚糸文を地文としている。

16は深鉢形土器の胴部片で地文のみである。17は頸部直下の胴部片でLRの単節縄文を施す。

18～26はⅡ層出土の土器である。18は黒浜式土器で口縁は波状を呈する。口唇部には刻みを施す。19は勝坂Ⅲ式の隆帯による渦巻文である。隆帯の下端部に刻みを施す。20は平口縁で、口唇直下に連鎖状の隆帯を施す。21は加曾利EⅠ式の深鉢形土器である。口縁部文様帯は横位の隆帯を短沈線で結合し、内部は長蛇行の沈線文を充填する。22、23は加曾利EⅡ式土器である。22は胴部片でRLの単節縄文を地文として施す。23は底部付近の破片資料で、器面には撚糸文を施す。24、25は底部である。24は浅鉢形土器であろう。26は縄文後期の称名寺式土器である。沈線によるモチーフ内は地文を磨り消している。

27はⅠb層出土の土器で、波状口縁を呈する勝坂Ⅲ式である。口唇部は外側に肥厚し爪形文を施す。口縁部は半裁竹管により2条の隆帯が廻り、直下に斜位の集合沈線を施す。

28～42はⅢ層出土の土器で、28、29は縄文前期の土器である。胎土に繊維が多く含まれる。30は阿玉台Ⅰb式の土器である。隆帯に沿って1条の沈線を施す。31は阿玉台式土器である。胎土に雲母粒子が多く含まれる。32は縄文中期の土器と想定される。33は加曾利EⅡ式の土器である。隆帯が弧状のモチーフを描く。34、35は無文の土器で、縄文中期に帰属するであろう。36は堀之内Ⅰ式の深鉢形土器である。沈線により蕨手文を描く。37は底部片で縄文後期であろう。38～41は縄文後期の土器と想定され、いずれも無文である。38は口唇部の一部に刻みを施す。41は胴部の屈曲部で、浅鉢形土器か注口土器であろう。42は古墳時代前期の壺型土器の口縁部に比定される。粘土を折り返し、複合口縁としている。

43はグリッド出土の土器で、繋ぎ弧文を描く。加曾利EⅠ式の土器である。隆帯の結節部は突起となって上面に渦巻文を描く。

（14）木製品・木材

木製品及び木材は調査区全体から出土しており、出土位置を記録した木材は約1,300点である。このうち自然木等を除き、人為的な加工痕あるいは遺構の構成材として利用された木材について図示した。なお、遺物の計測値等については第41表にまとめた。

1号木組遺構出土木材（第267図1～5）

1～5は1号木組遺構を構成する部材を図示した。東西方向に配置された構成材である。1は丸木材で、二つに分断しているが同一個体である。直線状の材で、木組みの敷材として使用されていた。樹種はウルシであるが、樹液採取のための掻き痕等は確認されなかった。2は丸木材で上部に仕口状の加工が施される。下端部は股木部分で焦がしによる切断面が残る。樹種はオニグルミである。3は裏面が炭化しており、焦がしによる加工が行われていた。丸木材であり、仕口状の挟りが中位部に刻まれる。樹種はウルシである。4は割材である。上下端部の切断面が認められる。下端部は焦がしており、ハツリによる加工痕がうかがえる。樹種はクリである。5は割り材である。表裏面に焦がしによる炭化面が残り、面的な削りが施される。下端部にわずかにハツリによる削りが確認できる。樹種はクリである。

6～8は1号木組遺構周辺から出土した小型の加工木であるが、同遺構に帰属する可能性が高い。6は割材で、上下に削り痕が残り、下端部は切断されている。上部にはハツリによる加工痕も残る。樹種はコナラ節である。7は板目材である。下端及び右側縁に面的な削りの痕跡がある。全体的に焦がしの加工痕が残る。樹種はクリである。8はみかん割り材である。両端部は切断されている。下部に面的な削りによる加工痕が残り、右半部は焦がされている。樹種はクリである。

5号クルミ塚出土木材（第267図9～12）

5号クルミ塚から出土した加工木材を一括した。9は丸木材である。クルミ塚のプランの上面に倒置された状態で検出された。上端部は切断され、下端部は求心状の削りによる加工で尖る。体部上半に仕口状の挟りが観察される。樹種はカエデである。10は板目材である。上下端部はハツリ面が観察され、切断痕となっている。中央部には仕口状の挟りがある。樹種はクワである。11は板目材である。表裏面に面的な削り痕が残る。樹種はクリである。12は椀形木製品の未成品と想定される。瘤状の材の中央部に円孔が穿たれる。孔の周囲は細かな削りによる加工痕が観察される。樹種はオニグルミである。

グリッド出土木材（第268図13～28）

13～15はE4グリッドの泥炭層に打ち込まれていた板状を呈する杭の一群である。13はミカン割材である。表裏面に削りによる加工痕が残る。また表面は焦がしによる痕跡が認められる。全体を刀状に成形され、下端部は切断後に磨かれている。樹種はクヌギである。14は板目材である。左側縁上部に仕口状の挟りを有する。下端部から下半は焦がしによる加工痕が残る。全体を笏状に成形され、下端部は1と同様に研磨されている。樹種はクヌギである。年代測定の結果は縄文中期末から後期初頭である。15は割材である。全体的に焦がしによる加工が認められる。裏面上端は大きなハツリ痕が観察される。下端も鉋状の道具により断たれたような痕跡が観察される。表面は樹皮が残り、樹種はクリである。

16はミカン割材である。上端はハツリ痕、削り痕が残る。全体的に焦がしの加工痕が認められ、下端部は磨かれて先鋭する。中央部には仕口状の挟りがある。樹種はクヌギである。年代測定の結果は縄文中期中葉である。

17は住居の屋根を支えた垂木と考えられる加工木である。丸木材で上部に仕口状の挟りが明瞭に残されている。上端部は弧状に磨かれているが、下端部は折損状である。樹種はオニグルミである。

18は樹の瘤を繊維方向に裂いた木製品である。下部がやや内屈する。表面は丹念に磨かれており、滑沢を帯びる。裏面は面的な削り痕が一部に認められ、同様に磨かれる。上端部は切断されている。用途は不明で樹種はイヌガヤである。

19は彫刻状の木製品である。半割材で樹種はクリである。人か動物の顔を表現しているようにみえるが、眼球部は節であり、口腔部は自然のウロである。ただし周辺部に焦げた痕跡が認められ、人為的に加工された可能性が高い。また、中央部は平行する挟りを3条施すが、いずれも焦がしによる加工が行われている。下半も焦がしによる痕跡が明瞭である。また表面は磨かれており、裏面は一部を焦がしているが明瞭な加工痕は確認できない。

20は上端部を尖らせ、本体中央に仕口状の挟りが二条刻まれた棒状木製品である。下端部はハツリ面がみえ、明瞭な刃止まり痕が残る。素材加工は割材で、樹種はクヌギである。

21は両端部にハツリ面が観察される。割材であり、表面は自然面が残る。樹種はシオジである。22は割材である。裏面は繊維に沿って割られており、平滑である。下端部はやや焦がしによる成形痕が認められる。樹種はコナラである。23は割材で、表裏面に焦がした痕跡が残る。下端部にハツリ面が残り、体部には挟りを施す。樹種はクヌギである。24は割材である。直方体に仕上げられ、側縁部に面的な削り痕が残る。樹種はコナラである。25、26は同一個体で、ミカン割材である。上端部は削りによりやや尖らせている。26の下端部はハツリ痕が明瞭である。樹種はエゴである。27は板目材である。表裏面は繊維に沿って割られており、平滑である。樹種はコナラである。28は板目材である。表面は自然面を残し、裏面は繊維に沿って垂直に割られている。下端部に削りによる加工痕が残される。樹種はクワである。

ウルシ材（第269図29～31）

ウルシ材は全部で5点が検出され、うち2点は1号木組遺構としてすでに記述した。

29～31はウルシ材である。いずれの材にもウルシ掻きの痕跡は見い出せなかった。

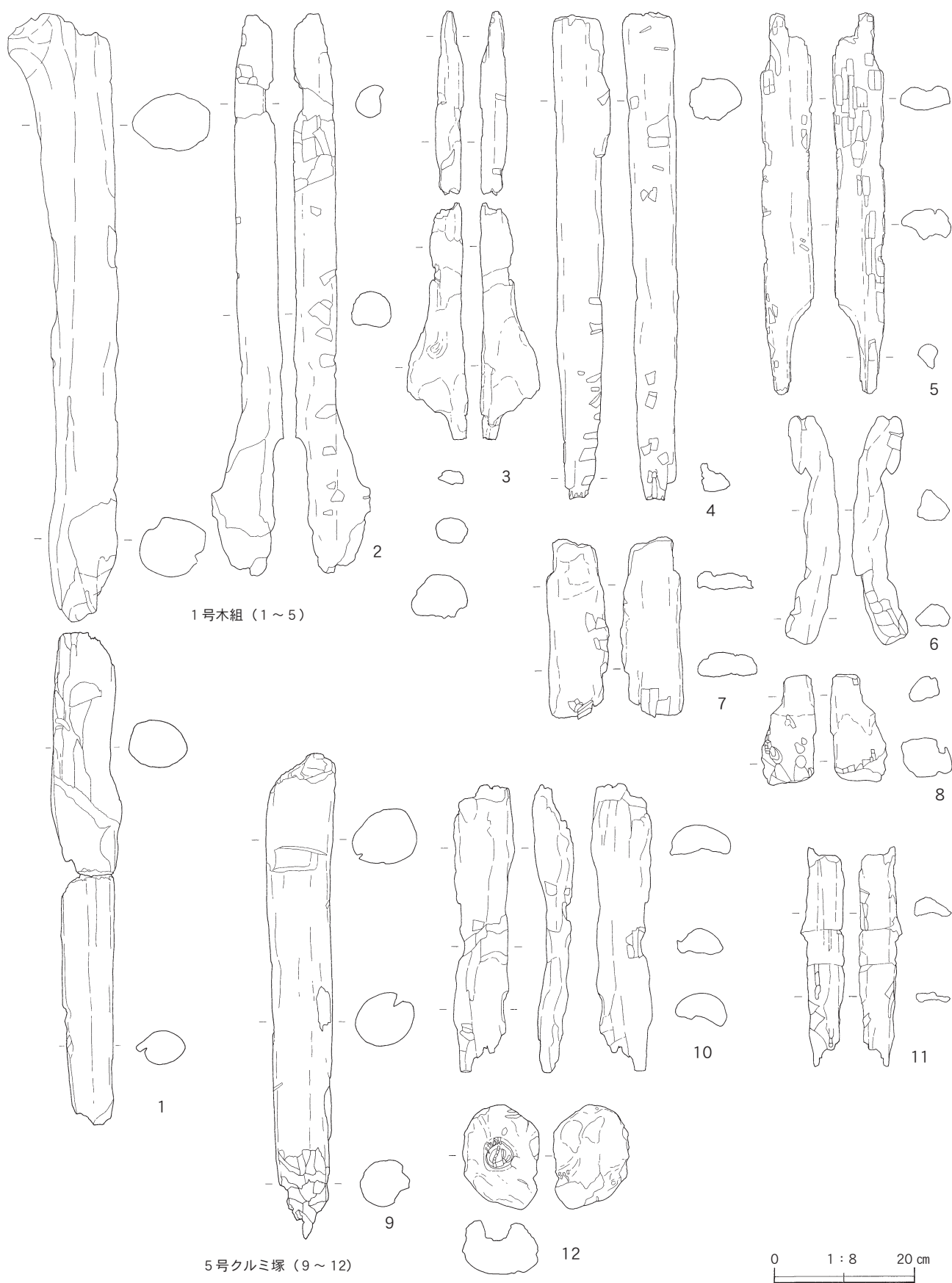
29は1号木組み遺構の西側から出土した丸木材である。人為的な加工痕は確認できなかった。年代測定の結果は縄文後期前葉である。

30、31は出土した層位から縄文時代中期のウルシ材と想定される。30は4号土坑の覆土上層から出土しており、半割材である。31は割材で、3号溝跡C5グリッドのⅢ層中から出土している。

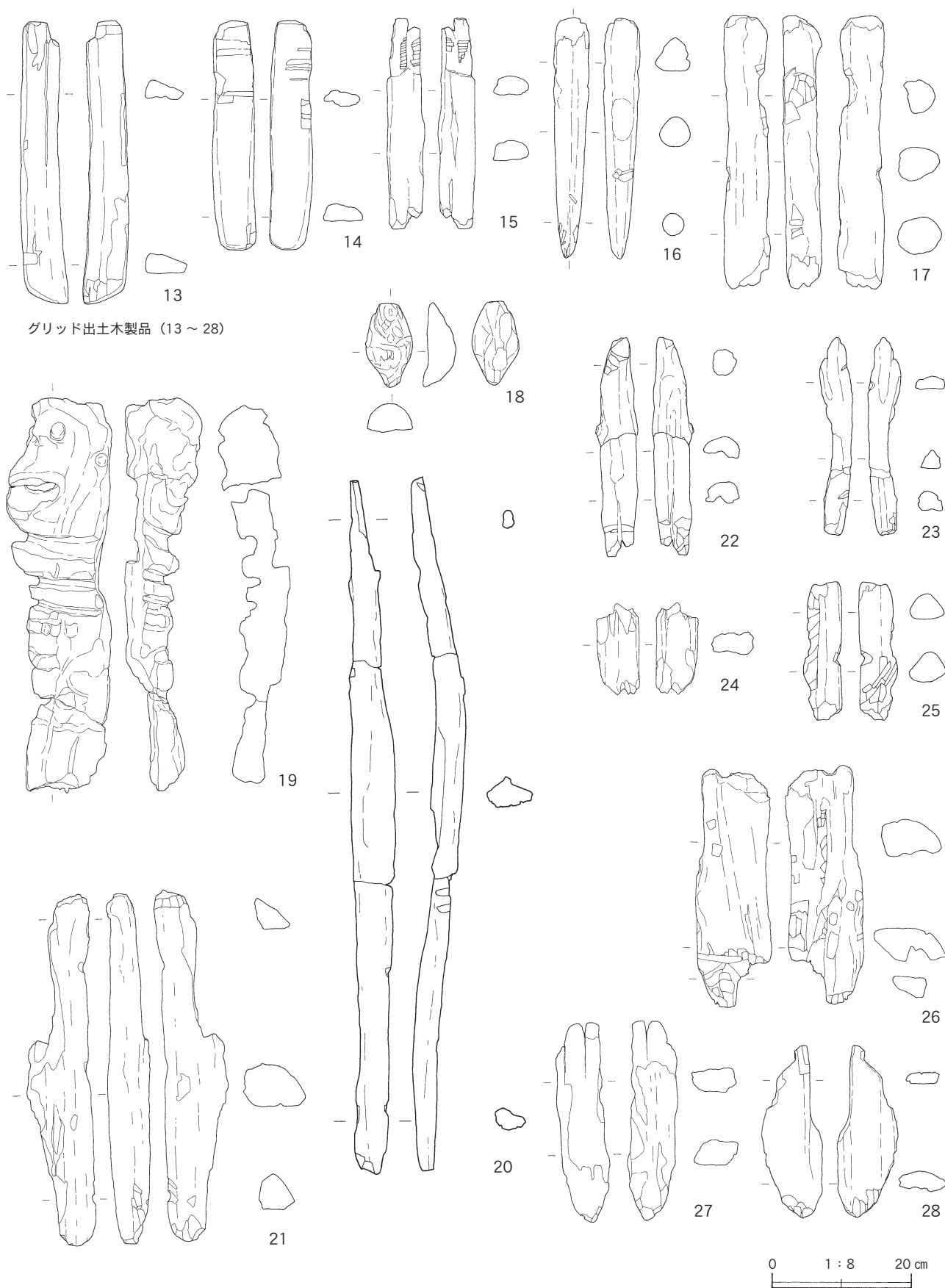
第41表 木製品等一覧表

図版番号	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形状	樹種	出土位置
第267図1	構成材	(159.2)	径 9.0	—	丸木	ウルシ	1号木組遺構
第267図2	構成材	78.7	径 6.5	—	丸木	オニグルミ	1号木組遺構
第267図3	構成材	(60.2)	4.4	3.5	丸木	ウルシ	1号木組遺構
第267図4	構成材	67.5	8.0	5.0	割材	クリ	1号木組遺構
第267図5	構成材	54.5	7.3	3.5	割材	クリ	1号木組遺構
第267図6	加工材	32.6	5.9	4.5	割材	コナラ属	1号木組遺構
第267図7	加工材	25.6	8.6	3.5	板目	クリ	1号木組遺構
第267図8	加工材	15.5	7.6	5.6	割材	クリ	1号木組遺構
第267図9	加工材	71.0	径 9.5	—	丸木	カエデ属	5号クルミ塚
第267図10	加工材	40.0	8.5	3.8	半割	クワ属	5号クルミ塚
第267図11	加工材	31.5	5.4	2.7	板目	クリ	5号クルミ塚
第267図12	未製品	15.1	10.4	7.8	—	オニグルミ	5号クルミ塚
第268図13	板状杭	44.0	6.1	2.9	ミカン割り	クヌギ	E4グリッド
第268図14	板状杭	32.9	5.7	2.4	ミカン割り	クヌギ	E4グリッド
第268図15	板状杭	30.4	5.4	2.9	割材	クリ	E4グリッド
第268図16	木製品	34.4	5.0	4.8	ミカン割り	クヌギ	C4・E4グリッド
第268図17	垂木	39.3	6.7	5.3	丸木	オニグルミ	D5グリッド
第268図18	木製品	12.1	6.6	4.1	—	イヌガヤ	D5グリッド
第268図19	木製品	55.0	12.2	10.8	半割	クリ	—
第268図20	棒状木製品	99.5	5.5	4.1	割材	クヌギ	B5・C5グリッド
第268図21	加工材	35.2	6.1	3.6	割材	シオジ	E4グリッド
第268図22	加工材	28.4	4.4	2.8	割材	コナラ	D4グリッド
第268図23	加工材	19.9	5.3	4.3	割材	クヌギ	C4グリッド
第268図24	加工材	13.1	6.1	3.3	割材	コナラ	D4グリッド
第268図25	加工材	33.5	11.0	5.5	ミカン割り	エゴ	E4グリッド
第268図26	加工材	51.5	9.0	5.5	ミカン割り	エゴ	E4グリッド
第268図27	加工材	28.7	6.6	3.6	板目	コナラ	D4グリッド
第268図28	加工材	24.6	8.6	2.9	板目	クワ	D4グリッド
第269図29	加工材	34.3	6.5	3.7	丸木	ウルシ	1号木組遺構
第269図30	加工材	12.7	3.5	1.8	半割	ウルシ	SK4
第269図31	加工材	10.5	8.4	4.5	割材	ウルシ	SD3

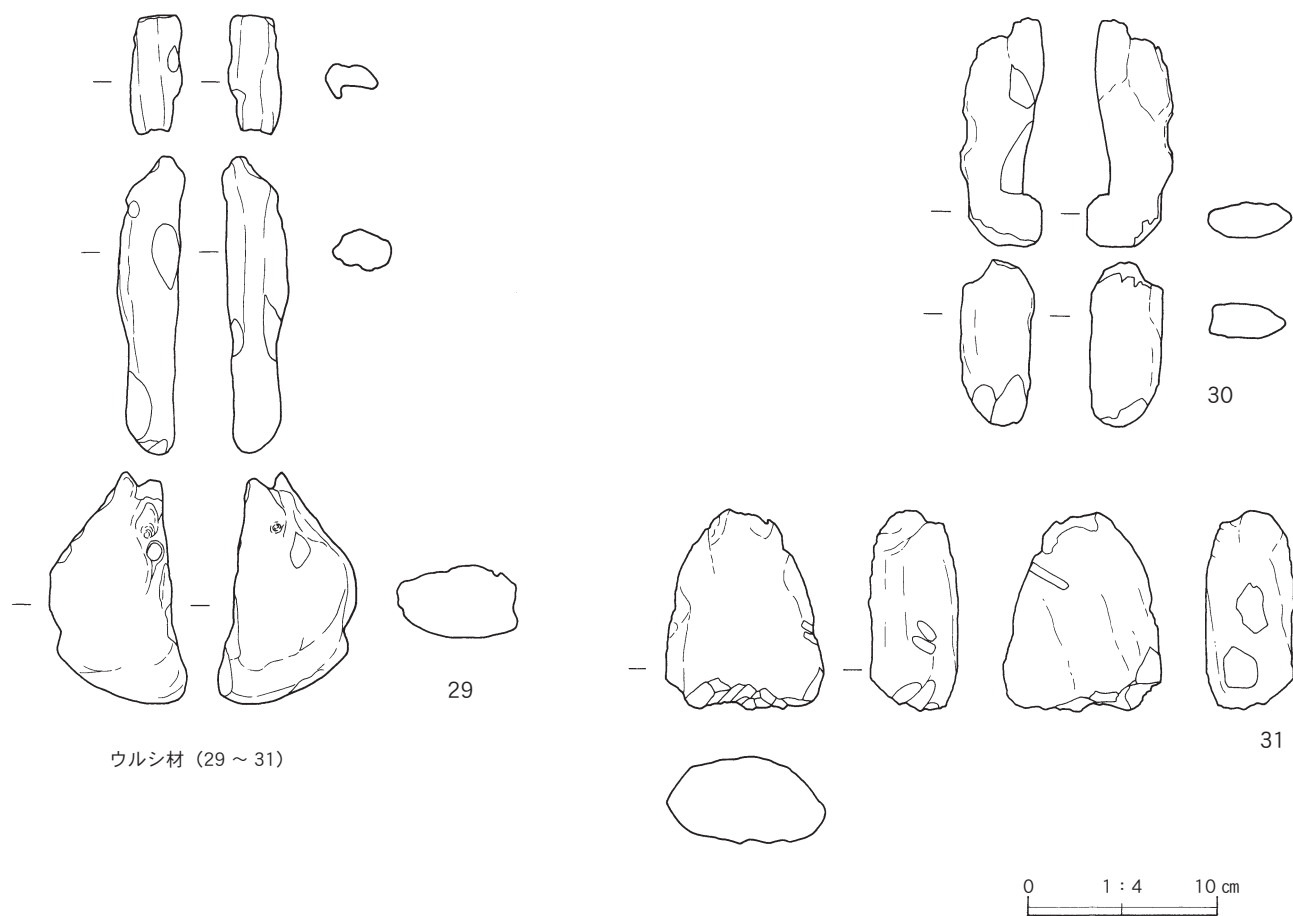
※樹種は能城修一氏の同定による（第Ⅵ章第6節）。



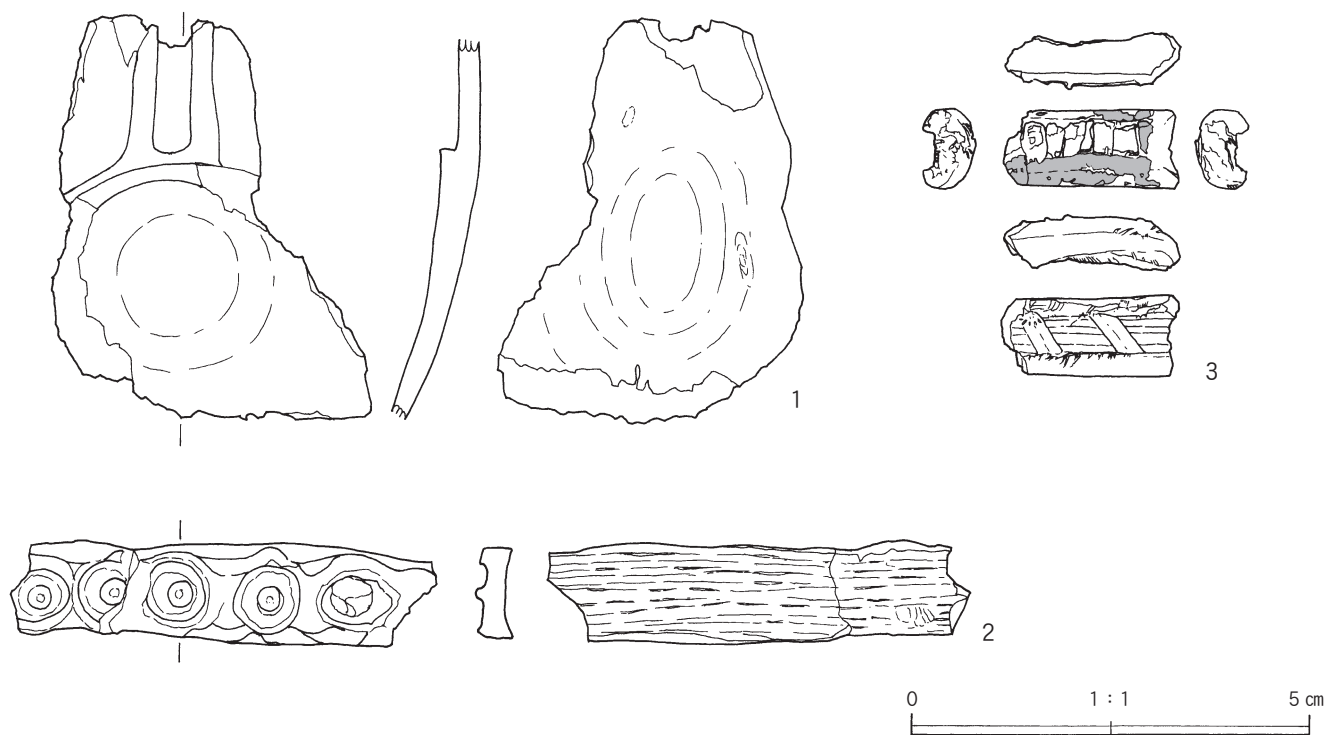
第267図 縄文時代の木製品・木材 (1)



第268図 縄文時代の木製品・木材（2）



第269図 縄文時代の木製品・木材 (3)



第270図 木胎漆器

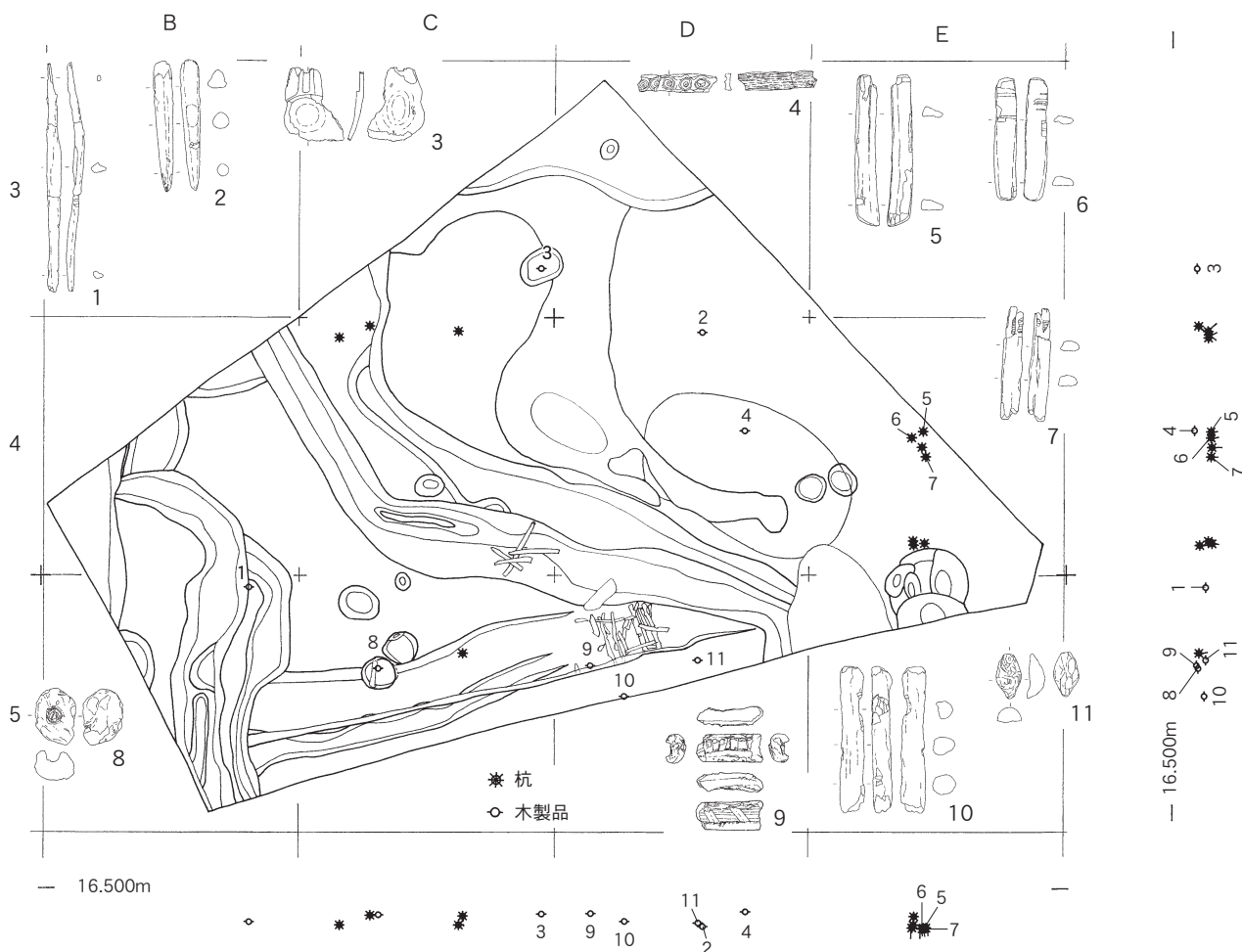
木胎漆器（第270図）

第4次調査区からは、漆の塗彩された木胎漆器が出土している。しかし漆塗土器に比べるとその出土数は少ない。今回図示した遺物はいずれも断片の資料で3点である。

1は2号クルミ塚から出土した匙である。受部と柄部の結節点が遺存しており、現存長4.8cm、幅4.1cm、厚さ0.5cmで、樹種はイヌガヤである。柄部には直線状に抉った装飾が明瞭である。また、受部は緩やかな弧状に加工されている。柄部との結節部は段差を設けており、モノを掬う受部の機能を明確に意図した造りとなっている。

2は木胎漆器の突起部に付されていた装飾部である。6号クルミ塚から出土した際にはすでに木胎が失われており、塗布された漆の胎のみが検出された。このため木胎の樹種は不明である。現存長は5.3cm、幅1.4cm、厚さは0.3cmである。装飾部の表面に五つの円文が認められたが、いずれも形状を異にしているため、単なるスタンプではないと判断され、ここに環状の装飾が固着されたと考えられる。また、裏面には木胎の痕跡が圧痕として残されていたため、個別に分析を行い（第VI章第10節参照）、ササタケ類の繊維であったことが確認されている。

3は3号溝跡より検出された腕輪の一部である。赤漆により彩色され現存長3.8cm、幅2.0cm、厚さ0.9cmである。胎の樹種は2と同様に漆部のみが残されているため判明しなかった。ただし、内面に胎の圧痕が残されていたため、本報告において構造分析を行い、ササタケ類と判明している（第VI章第10節参照）。形状は



第271図 杭・木製品出土状況

緩やかな曲線を描いており、本来はリング状を呈したと考えられる。内面は内削り状に抉れた形状になっている。また表面には方形の物体を連ねて固着したような痕跡も確認されている。

第3節 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

1号溝跡（第191図）

調査区北西部隅のB4グリッドに位置する。遺構の大部分は調査区外に延びており、調査された範囲で幅1.6m、深さ0.75m、長さ3.5mである。縄文時代の6号溝跡及び9号土坑を切っている。流れは北から南に向かい、2号溝跡が調査区外で大きく蛇行して接続すると思われる。断面の形態は葉研形である。出土遺物は少なく、流れ込んだ縄文土器以外の遺物は検出されなかった。

2号溝跡（第272・273図）

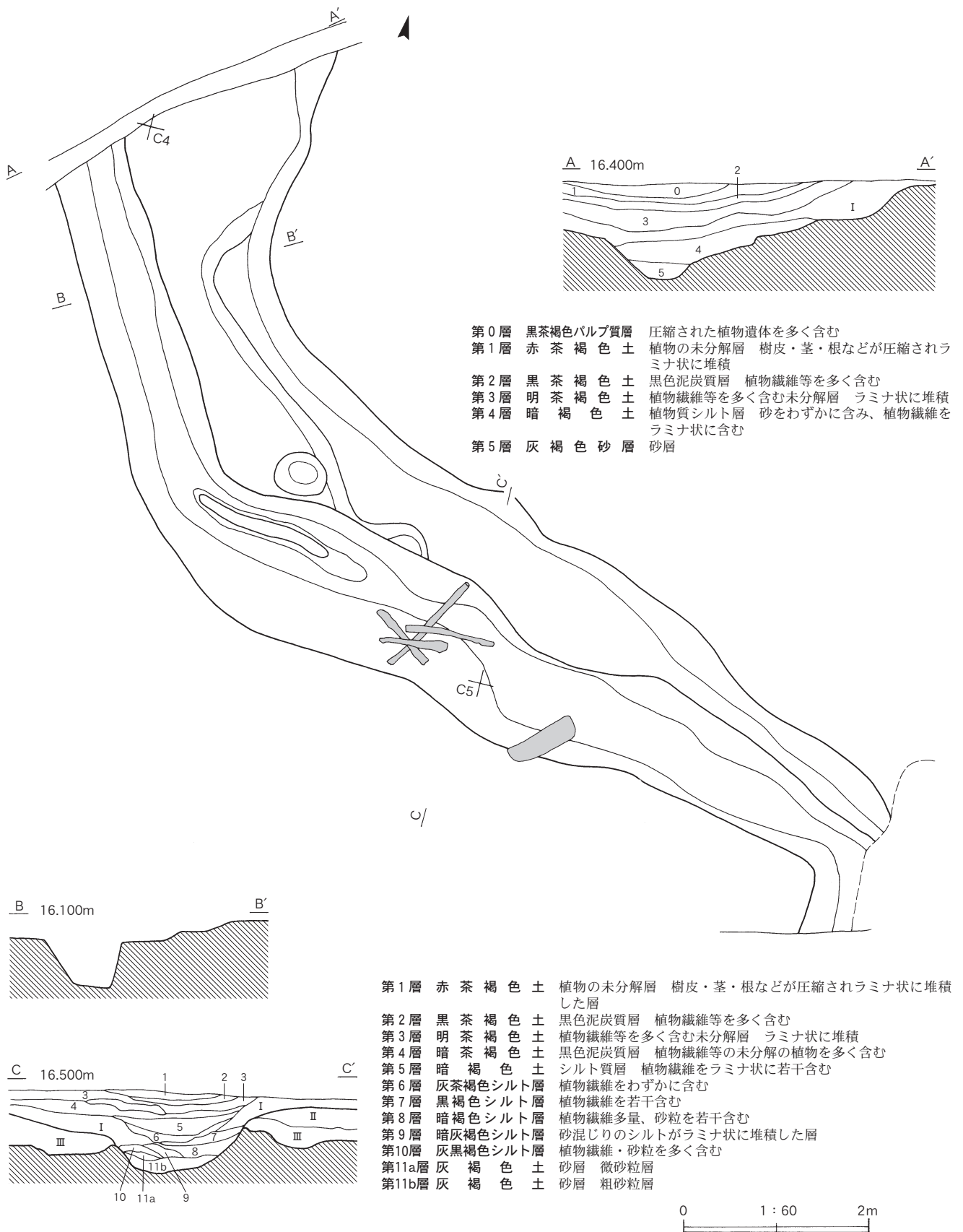
溝跡は調査区中央部をクランク状に延び、南から北に向かって流れている。縄文時代の砂道跡、3号溝跡、8号土坑を切っており、南部は攪乱で一部が壊されている。溝跡は基盤層である青灰褐色土層（V層）を大きく掘り込んで構築されており、自然の流路の一部を人工的に整えたと考えられる。規模は北側に行くほど幅広となり、深さも深くなる。調査区内の最大幅は3.5m、最大深度は0.8m、長さは14.0mである。断面の形態は概ね西側の立ち上がりに比べ、東側の立ち上がりが急である。底面は平坦であるが一部に島状の高まりが残されている。出土遺物については、確認面において自然流木の集中箇所が検出され、この直下の覆土上層に棒状の木製品が4本重なった状態で検出されている。この木製品は年代測定を行った結果、弥生時代後期に比定されており、2号溝跡の帰属時期も同様であると想定される。覆土中から出土した遺物は、流れ込んだ縄文時代の土器片等が多く出土した。

2号溝跡出土木製品（第274図・第42表）

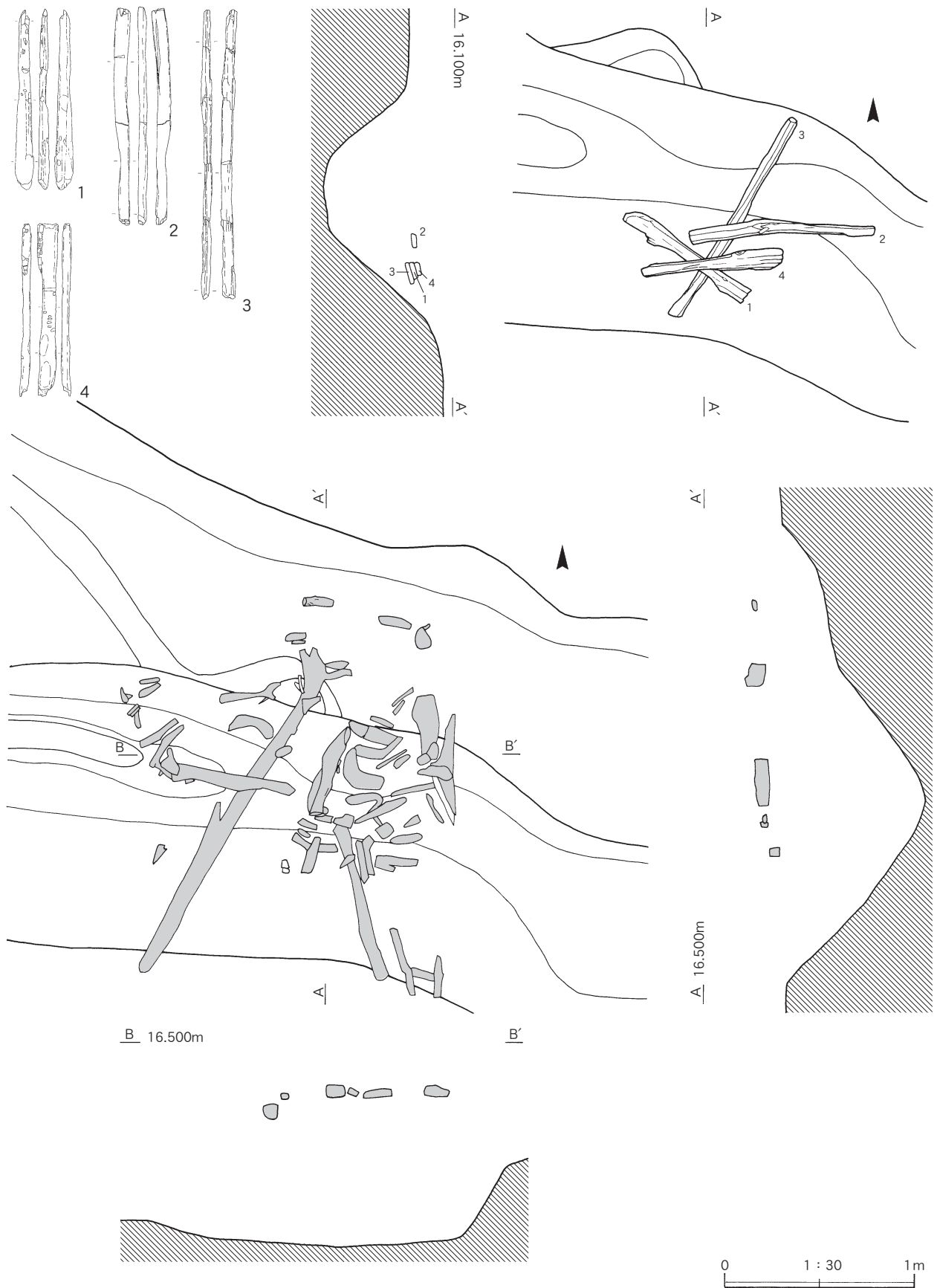
1～4は2号溝跡から出土した棒状の木製品である。1は割材で、上端部はハツリ痕が明瞭に残る。下端部は焦がした痕跡があり、炭化範囲は下半3分の1まで及んでいる。表裏は面的な削りによって成形されており、樹種はコナラ節である。2は板目材で、下端部はハツリ痕が明瞭である。上端は切断されている。表裏面とも焦がされており、その後面的に削られている。断面はほぼ方形で、上端は矩形に幅広となる。樹種はコナラ節である。3はミカン割材で、上端部は切断されている。下端部は焦がされており、その後、求心状の加工で尖鋭化しており、表裏面とも面的に削られる。樹種はコナラ節である。4は割材で、断面は方形に加工される。上下端部の切断面が認められ、下端部は焦がしており、ハツリによる加工痕が認められる。樹種はコナラ節である。

第42表 木製品観察表（弥生～古墳時代）

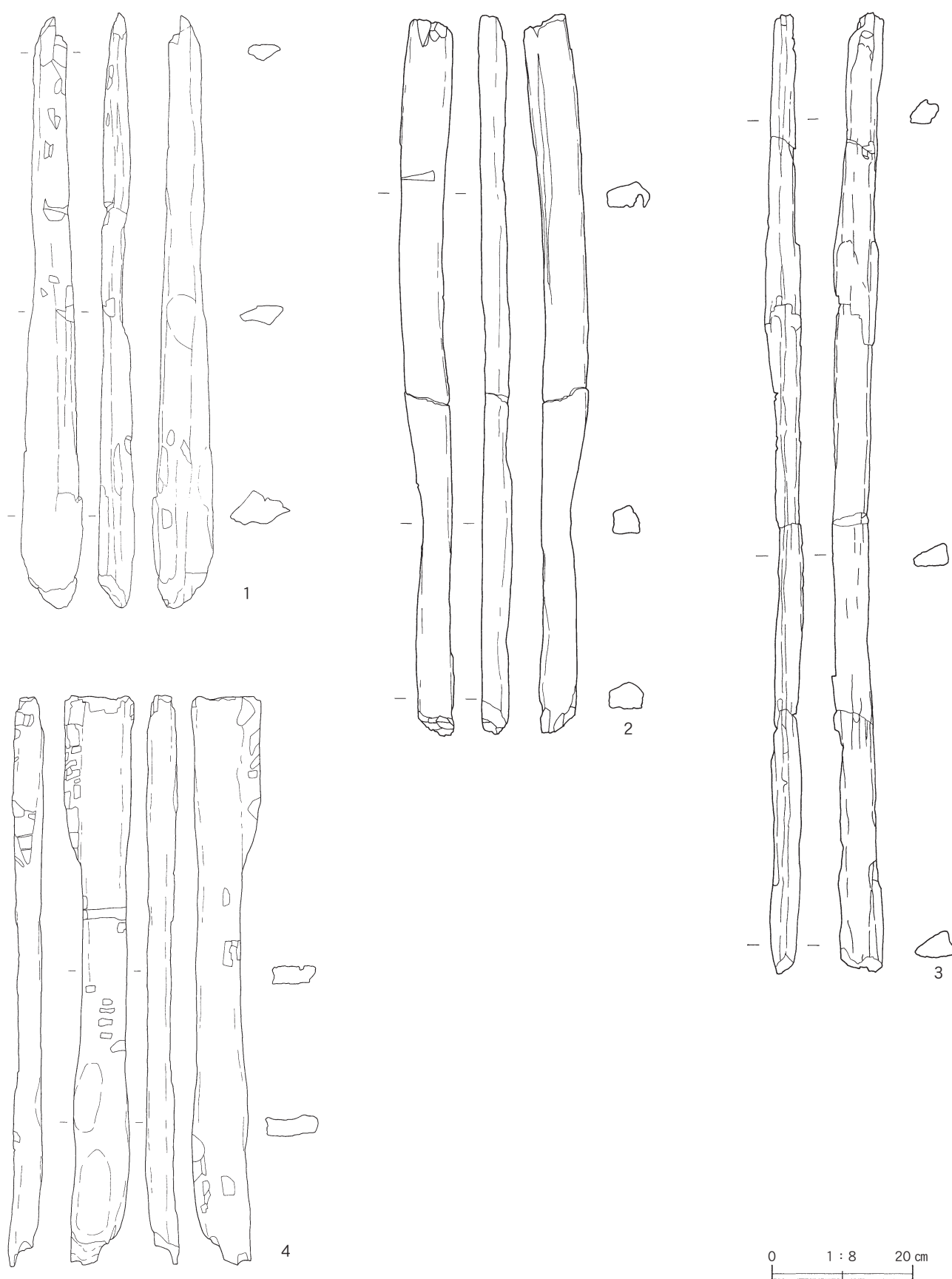
図版番号	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形状	樹種	出土位置
第274図1	棒状木製品	85.0	8.5	4.5	割材	コナラ節	SD2
第274図2	棒状木製品	99.5	6.5	3.9	板目板	コナラ節	SD2
第274図3	棒状木製品	136.3	5.0	4.8	ミカン割り	コナラ節	SD2
第274図4	棒状木製品	81.0	9.5	3.7	割材	コナラ節	SD2



第272図 2号溝跡（1）



第273図 2号溝跡(2)



第274図 弥生時代末から古墳時代初頭の遺物